

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第七十六卷 第七号 日本幼稚園協会

7



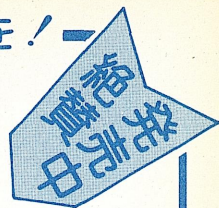
*Magabe*

保育室の本棚にぜひこの一冊を！

## 保育専科 別冊

●〈保育に生かす自然の遊び〉●

# 飼育と栽培の方法



東京家政大学教授

山内昭道 監修

自然との触れ合いを大切に、  
飼育と栽培の考え方と方法を、  
図解と実践例で紹介します。  
園内だけでなく、園外での自  
然への親しみ方、楽しみ方な  
ど詳細な解説は保育にすぐ役  
立ちます。

定価600円

(保育専科6月号とも900円)

### 内 容

#### 第一章 保育の中の飼育・栽培

保育の中で子どもと飼育・栽培の関わりを解説

#### 第二章 自然の中での遊び

子どもたちが自然とのふれあうことを深める遊びを紹介

#### 第三章 小動物の飼育

カイコ、チョウ、アリ、カタツムリ、モルモット、ウサギ、ニワトリ等の飼育表と飼育の方法を紹介

#### 第四章 草花と野菜の栽培

一年草、宿根草、球根類の栽培とその一覧表。園に適した野菜の栽培の方法とポイント等を紹介

#### 第五章 飼育と栽培の実践

実際に飼育・栽培を実践した園の実践報告を紹介

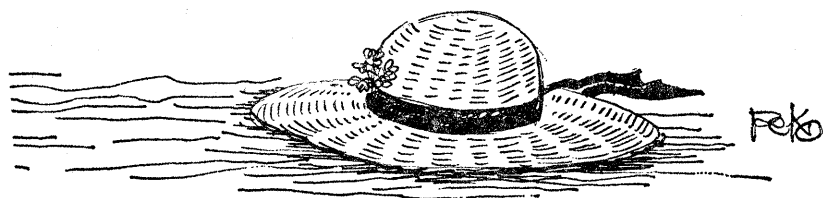
株式会社

フレール館

# 幼児の教育

第七十六卷 第七号





# 幼児の教育 目次

第七十六卷 七月号

© 1977  
日本幼稚園協会

表紙 永瀬義郎

(1,2,3,4,5)

カット 中島英子

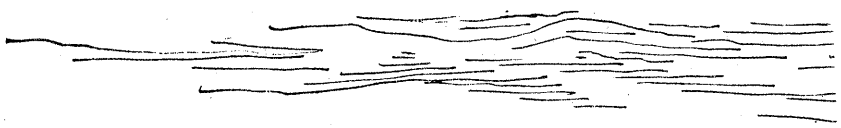
幼児教育第二世紀にむかって.....黒田成子(4)

星.....周郷博(8)

星をみる会.....波田野佳代子(11)

星.....森下博三(14)

ひとりひとりの子どもを見つめて ④.....赤羽美代子(16)



米国の幼児教育における五つの実験(十)……………大戸美也子(18)

私の保育……………河井 祥子(26)

写真・子どもたちの世界——カンカラ——……………西本 真(34)

星について……………柳瀬 睦男(36)

わたしの星……………神沢 利子(42)

星ふる高原……………菊池 光治(44)

★海外文献紹介……………(46)

図書紹介……………(51)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(八)……………津守 真(52)

おばさんの子どものころ 12 黄色い野原……………柴岡 治子(62)

# 幼児教育第二世紀にむかつて

黒田成子

わが国における幼児教育が百年にカバールした足跡は実に大きい。その理解や反省もまだ充分ではないのに、次の百年を考えたようにすることは途方もなく漠然としてとらえにくいことである。しかし、時はすでに幼児教育第二世紀となり、われわれはその一点からすでに何歩か歩み出しているわけである。この時に当たり、過去から将来へのパースペクティヴに立って、幼児教育を眺望し、将来への課題を考えることは必要である。同時に私は、現在もつとこうあるべきだ、こうありたいと願うこと——それがすなわち幼児教育第二世紀への課題にも連なると考えて、日頃思っていることを記してみたい。

○

過去百年の幼児教育の中で特筆すべきことは、明治の初年、まだ「保育」という言葉さえなかった頃、幼児が何かの付属物としてではなく、まさに幼児そのものとして教育を受けるようになったことである。幼児教育の対象が幼児であるという、今

日では当然のことが、当時としては画期的なこととしておこったのである。戦後、幼児を含むすべての国民が基本的人権を与えられ、自由に教育をうける権利をもつようになった。

その後わが国の経済高度成長に伴い、産業国日本の「二十一世紀を担う子ども」というキャッチ・フレーズと共に幼児教育が急速に脚光を浴びることとなった。昭和五十一年度には小学校へ入学する児童のうち、幼稚園を終了した子どもは六十四パーセント、保育所に在籍した子どもは二十五パーセント以上となり、就学する子どものうち幼児教育機関を経て来た者は九十パーセントをはるかに越える現状となったわけである。

このようにわが国の幼児教育は大きな飛躍をとげた感がある。たしかに多くの幼稚園や保育所は施設設備が拡充され、幼児教育の前途が開かれ、第二世紀へ順調に進んでいくような印象である。

しかし、第一世紀の反省なくして第二世紀への展望はあり得

ないことを思うとき、一見躍進しつつあるわが幼児教育界の内に、実に眼を向けずにはいられない。そこには、はたしてわれわれの先達たちが意図した子ども本来への教育愛がどれだけ動機づけとなっているだろうか。「……個人として尊重される」という憲法の十三条はうたい文句だけなのか。われわれはほんとうに子どもの人間性を考えつづけてきただろうか。

○

日本の学校では大学をはじめとして、教育を私立学校に依存しているところが大きい。殊に幼児教育では私立幼稚園の占める率は六十パーセントを越える現状である。私学の独自性を生かした優れた園も多くあるが、一方、人件費や諸経費の著しい高騰等のため経営面が優先し、保育内容の面では推奨できない園もあることは反省させられることである。

昭和四十六年に中央教育審議会の答申が出た頃、私学は教育の公共性の一端を担いつつも、同時に自主的な独自性を発揮しなければならぬということが度々いわれたものである。幼稚園も単なるもうけ主義ではその存続もあやぶまれるとさえいわれ、独自性のある保育内容の必要が叫ばれた。

たしかに法に準拠したレールの上を機械的に走るのではなく、自律的な考えのもとに独自性を持つことは望ましいことで

あるが、それはあくまでも子ども一人一人の人權と人間性を考えるという前提に立っているということを忘れないでほしい。その理念は理念として持ちながら、実際には園に特色を持たせると称して、園児獲得に都合のよい方針をもつてくるとすれば、これは自戒しなければならないことである。

今も昔とかわらず歌や遊戯、絵画等の指導が特別に行なわれている。あるいはお茶や英語を教えたりすることを園の特色としているところがある。私はこれらが好ましくないと言っているのではなく、まず子どもたち自身のためにこれらが絶対必要であるかどうかの問いが必要であると言いたい。教育の方法の前に明確な目標があるのは当然である。そしてもし、激しい成長発達をとげるこの時期に、子どもたちの教育にとってもっと優先することが他にあるならば、先ずそのことに力をそそぐべきである。昨今は知育面の指導に力をいれる園が多くなっているが、教育熱心な親たちに迎合する主旨のものを見かけることは残念である。これも、いくつ文字や教を記憶したかというように、早急な結果主義に陥らず、何が子どもにとってほんとうの教育であるかを親たちと共に考え、正しい幼児教育のあり方をよく説明し共感を得ることが大切である。

また、最近福祉の面においても、差別教育の撤廃ということ

から正しい教育のあり方について、マス・コミ等がこの問題を重視してきたことは喜ばしいことである。しかし混合保育の看板をかかげ、障害児を園に入れてからよい教育をしているとは限らない。問われるのは看板ではなく教育の中身である。

私は設備や人員の不充分さと戦いながら幾人かの障害を持った子どもを迎えるために、綿密な準備と工夫を凝らしている園をいくつか知っている。そこには障害のある無しにかかわらず、幼児の教育に対する情熱が漲っている。まして子どもを利用した宣伝等はないこともである。「混合保育」などという名称ができる以前から、これらの園では子どもたちが互いに教えたり、教えられたりして支え合って暮らす園風ができている。そしていわゆる特定の保育方法にとらわれないで、子ども中心の保育が行なわれている。

○

子ども自身を生かす園とは、その子どもの発達に適した環境と、その個人にもっとも必要な保育を行なうことのできる園に他ならない。その形態は集団で集まるグループ的なものもあるだろうし、個々人に対応する個別的なものもあるだろう。それは時と場合により異なるが、あくまでも子ども自身のためのものであることが第一条件である。「集団教育」のための子ども、

「自由保育」のための子どもではなく、子ども自身のための内容や形態、方法が大切である。この視点に立つ時、子どもにとって本当の意味での自律と自由が与えられるのである。

第二世紀へかけての大きな課題の一つに、真の意味での「自由」の獲得ということがあげられるだろう。終戦後民主主義の名のもとに「個人」および「自由」ということが大きくとりあげられるようになった。民主主義の歴史も、その背景となる思想や理論が深く追求されないまま、いつのまにか三十年余の歳月が流れ、自由については表面的な解決がまかり通っていることは遺憾である。現に、「自由」ということを一種の「解放感」とだけ解釈している指導者、教育者、親や学生たちがいかに多いことだろうか。そのためか、自由保育という言葉に対して誤解が生じやすいのは当然かもしれない。

ある母親たちの研究グループで自由保育の特色をきいてみたが、「好きな事をさせてあげる」「思う通りにする」「のびのびと遊ぶ」等をあげている。自由保育では各自が自発的に遊びを選ぶことができるというのは当たりまえである。私が不思議に思うことは「自由保育は自由にすることであって、何も教えてはいけない」「自由保育ではしつげができない」「……勉強がおくれる」「……消極的な子どもには向かないのではないか」と

いうような発言であった。自由保育とはそのような放任保育ではない。子どもの側から言えば自由に行動できる生活であり、（但しこれには集団としてのワクがあるが）保育者の側から言うとき正しい意味での自由人を形成しようとする保育である。もちろん主体は子どもであり、保育者は間接的助成者である。

真の自由人とは自主、自律の人であり、自由に自己実現ができると同時に、相手と共に意欲的に生きて行ける、真理を愛する人であると言えるのではないだろうか。第二世紀をになう子どもたちは、このようなたくましい自由人であってほしい。学歴社会と受験戦争をめざして勉強をつめこまれる子どもたちでは挫折してしまうだろう。まして冒険的なフロンティア精神と行動力は望めないだろう。

つまり自由人とは、身勝手なことをする人ではない。社会人としての規律と責任あつての自由であることはいうまでもない。いわゆる自由保育（あるいは誤解され易いので単に「保育」と言ってもよいと思う）と基本的生活習慣を身につけさせることは全く矛盾しないことである。むしろ子どもが自由に選振するものの中に、教育的、倫理的に望ましくないものがある場合は、保育者が環境を整えて、望ましいものをとるように背

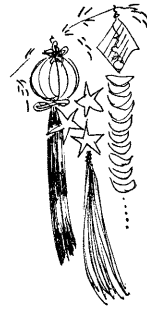
後からの助けが必要である。また事柄によっては、大人がハッキリと教える必要性を感じる時もあるだろう。こうした時に大人が単に「待つ」姿勢がよいとは限らない。子どもの自発性をよびおこすように、子どもの考えを思う存分理解し、伸ばすためにせっかちなわれわれ大人は「待つ」ことがいかに大切であるか。これは言う迄もないことであるが、保育者はどこ迄待って、どこで介入してよいか否かを見分ける賢明さがほしい。

紙面がつきてしまったが、子どもに自由人の理想像を画く以前に、保育者や親も、社会の人々も、人間らしい人間とは何かを自らの課題とし、われわれ自身が自由人になることへの追求がなければならぬと思う。その意味で、子どもたちに深く関わりのある保育者教育の年限が延長されることを望むものである。また在学中、あるいは卒業後実際に社会に出て子どもと接触する仕事に従事した後、再び学校へ復籍できる制度が一般化されるようになることを期待する。

幼児教育第二世紀への目標は遠くにかかげておくだけではなく、われわれの生きつつある「今」という時点に立って、たえず新鮮な目標への問いかけをしながらか、一日一日の努力を積み重ねていきたいものである。

（東洋英和女学院短期大学）

## 星



私の少年時代の魂の「夜明け」みたいなものを「支え」守ってくれたものは星だったなア、と半世紀も昔のことを憶い出すことがときどきある。

この間も、新聞に野尻抱影先生のことが出ていて、私は先生の『星座巡礼』という本をあつ十五、六歳のころどんなに心のよき友のようにして読み、大事にいつももって歩いていたかを、「なつかしい（いとしい）」気持ちで思いだした。それともう一つ、『三つ星の頃』という服部嘉香という人の少年小説が、そのころの私の揺れやすい感傷を醇化してくれた大切な本だった。

この二冊の本に、私はほんとうに深い感謝をささげたい気持ちを、いまこの年になって感じる。

十月、木の葉が次第に散り終った夜空の、澄んだ東の地平

## 周 郷 博

線から昇ってくるオリオンの三つ星、天馬座のアンドロメダやカシオペア、春の日暮れの乙女座のみどり色にまばたくスビカ……野尻抱影先生は、あの星のまばたきに深く見入っていると、自分の胸の鼓動が、海の潮の満ち干（寄せ返すリズム）と似たように、いっしょに「動き出す」という、私には忘れられない文章で書いていた。

それに、もう一冊の本を挙げれば、当時新潮社からでていた小型の『石川啄木歌集』——これも、まえの二冊の本とはちがった意味で、私の少年時代の「導きの星」になった本だった。悲しみの時、失意の感傷のときに、これらの本がどれほど私のこわれやすい心を慰め、力づけ、引きしまりと希望をもち来してくれたか。

私はそのころ、中学（いまの高校）へも行けず、東京電力

（当時は東京電灯）の市川の田んぼの中の変電所に働いていて、その杜宅にすんでいた。故郷の家は貧乏になり、半ば分解家庭に近かった。

私が十六歳のときに関東大震災が起こり、そのあと石井重美という人の『地球の終り』という本が出て、これも、少年の心で深く影響を受け、読みふけて宇宙や地球や、そうして生きていることの神秘に私の魂の扉をひらいてくれた本だった。……天変地異、人間の生命のはかなさ——そういう地球に生まれた私が仰ぐ天空の夜空のあの広大無辺な宇宙の星空、星座（コンステレーション）の美しくまばたく、ほとんど永遠の姿。「さびしさのきわみにたえて天地に寄するいのちをつくづくと思う」と歌った伊藤左千夫という歌人は、その市川の江戸川の上流、松戸の近くに住んでいた人だった。

☆

私はいま、星のことを書くこうとして、自分の十五、六歳の少年時代を思いだして、いまさらのように深い感慨に思ひたっている。天変地異——それに「人為的な地異」である公害汚染と自然破壊、さらに核兵器のおそろしい貯蔵量と人間の心の荒廃——生きることのはかなさ。これらは、私の少

年時代とはちがった意味で、それよりもっと大きなスケールで私たち人類をつつみこみ日々に「侵蝕」しているのに、「それが見えないで」ただ目の前の「蝸牛、角上の争い」物質的享楽に溺れている私たちは、もう地平線も見えず夜空の星も仰がない。あまりにあまりに「この世的」になっていないか。古代ギリシャそのほかの「地下牢」は、太陽も、星も遮断された「海の下の地下の牢獄」だった。現代人の日常生活はその牢獄とどこか似ている。そこに教育という「神に近づく精神の伸長」があるか。そんなところに、開かれた健康な人間関係、「愛という花」は咲くか。生まれた子どもが人間に生まれた神秘をどうしてあらわせるか。

☆

戦後——日本の社会が次第に「変わって」ただ騒がしく「どこへ行くか」もわからず迷っていたとき、私は、もういちど星——「導きの星」にいつしらず心の触角をうごかすことになった。戦争が終って十二年目のことだった——一九五七年（この年に、ソ連がスプートニク打上げに成功して、アメリカの「教育」は混乱に陥る）の八月の始め、私は四国の松山へ講演に呼ばれていて、その晩の夜の八時ごろ、松山城

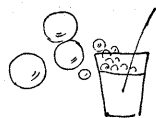
の城廓の林の道で、私は偶然にも（幸福にも）北の空、三十度ぐらゐのところに、あのずつと夢に描いた、「尾を引いた」<sup>テイル</sup>彗星をこの肉眼で「見つけた」のである。私はただただ「興奮して」うす暗い道で通りすがった若者——それに女子中学生に「見てごらん、彗星だよ」と指差して知らせるのに、だれも私の驚きと驚きを分かとうという心を知ってくれず、「そんなの学校で習ったワ」といって通り過ぎて行ってしまひ……私は宿へ帰って、物干台に出て、一晩夜の星空を眺め入って淨らかな瞑想に時をすごした。忘れない浄められた時間。

あのハレー彗星があらわれたのは一九一〇年、私がやっと三歳になったときだった。自分の記憶はぼんやりして殆んどなく、ただ母がその午後、彗星のひらいた尾の中へはいって、太陽が暗くなり、昼間なのに「星がぞろっと光りだし」やがて夕方の西の地平線に去っていったハレー彗星（ほうき星）の話をよくしてくれた。「母親の経験とことばの支えが、幼少時の経験と心の〈成長〉を一つになって支えている」のだろう。太陽系宇宙の迷い子のようなそのハレー彗星は、七十六年の周期で、九年後の一九八六年に地球の近くへもどってくる。私は、生まれたときから星と縁があった——。

その一九五七年からしばらくして六〇年代の始め、私はデイヤール・ド・シャルダンとの驚くべき（幸運な）「出会い」をした。一人の人間がこの地球に生まれてその意味を完成するのは「詩Ⅱ叙事詩」のようなものだ、ということに彼の「進化」の中では位置づけられる。その通りだ！ と私はこのごろ納得させられている。物知り競争、権力や金力の争いのみじめさ！

幼児がその人間になっていく過程も「星はあがっているが、濃い霧がかかっていてそれを覆いかくしている」のだという。時間をかけて、見直されるべきで、「人造の星」にしてしまえば、それは金平糖で、キツネか誰かに食べられてしまうだけのものになる。自然の恵みのような「霧Ⅱ肉体や感覚（の成長）でなく、その代りにスモッグや精神汚染という濁った濃い霧をどう浄化すべきかを、ほんとうにまじめに考えたい。このブルー・ガイヤ（宇宙に浮かんでいる、この生命の繁茂した、かけがえのない星）地球と地球の子 earthling（人間）の未来のために！ である。

## 星をみる会



もう数年も前のこと、「星」をテーマに夜の保育をしたことがあります。それは、今でも思い出す度に、その時のようすがありありと浮かんでくる程とても印象深いものでした。

ちょうど運動会を間近に控えていた頃（十月）のこと、私たちは毎日その準備に追われ、家路につくのはいつも日暮れという日が続いておりました。七時を過ぎるとあたりはもうすっかり闇につつまれ、ただ星だけが明るく輝き、よくバスを待ちながら、今迄気付かなかった星空を見上げてはその美しさに一日の解放感を味わったものでした。ちょうど折りもあり、「今世紀最大のジャコビニー流星群来たる」、「北の夜空に展開する絢爛たる星のショー」という新聞記事が話題を集めておりましたので、夜空の星をみるたびに來たるべき流星群を想像して心はずませ、子どもたちにも是非こんな素晴らしい自然との出会いを体験させたい、という願いが「夜の保育」の実施にふみきらせたのでした。実施日は、当然のこ

## 波田野 佳代子

とながらジャコビニー流星群來来の日と決まりましたが、流星群が現われるのは午後九時すぎということでしたので、希望者のみ、親または家族同伴という形をとることにしました。この試みは初めてでもあり、夜遅いことでもあり、そして歴史的な現象と結びついた保育でもありましたので、現職の先生方で行っている「動きながら保育を考える会」のメンバーやその友人等にも協力して載いて実施できました。それは、夜の保育をより一層効果的なものにしたと思います。一家団らんの時間をさいて、いったい何人のお母様方が子どもを連れて来て下さるか不安でしたが、結局、全園児の三分の一（二十数名）が参加することになりました。

当日の模様を簡単に紹介してみましよう。会場は、北の空を一望におさめることのできる、幼稚園の裏山に登りつめた所にある刈田。座席は、枯草のじゅうたんを敷いた畦道。舞台は田んぼ、刈られた稲の小山が舞台のそで。夜目にはこれ

でも立派な大劇場です。時間は午後九時から一時間。プログラムの中心は、何といつてもジャコビニー流星群の観賞ですが、それをより印象深いものにするため、絵本「星になった竜のきば」(中国民話・君島久子再話)のお話を、パントマイムとペープサート(夜光塗料使用)とを合わせた劇にして、研究会のメンバーに演じてもらうことになりました。その他特別参加で、男子高校生がギター、他の園の先生がフルート、短大の先生がアコーディオンと照明係を担当して下さり、私共の園の職員(三人)が誘導、進行係を担当しました。いよいよ当日。メンバーはリハーサルをし、自分の役割をかみしめるようにして時が来るのを待ちました。八時半を過ぎる頃、体験する未知の「何か」に向かう時の新面目な顔つきで三々五々集まってきました。

午後九時、みんなは自然がつくった劇場へ向かって出発です。星の歌をうたい、前後で声をかけあい、心を高めながら歩きます。「おーい、おーい」と追いかけて来た人も席が決まり、落ちついたところでみんなの明りが消され真暗になると、代って二つのサーチライトが夜空に向けてパッと輝き出します。サーチライトの先には、大きな星が点々と輝き、「あつ、あの星が一番大きいよ」「こっちにもある」「お星様

はどんなふうに見える?」「ピカーッ、ピカーッしてる」

「でも遠いんだもん」とのやりとりが自然にはじまります。

「星に名前がついているのを知ってるかな」「うーんと、わかんない」

「七夕の時出る星は何だったかな」「ああ、織姫と彦星」と思い出したように言う。子どもたちの所々に座っている他の先生や大人の方からは、北斗七星やカシオペア座の名

が出、それらがどこに見えるかサーチライトで捜していきま

す。「今夜は何という星をみに来たのかな」「えーと、ジャ、ジャコビ何とかって言うの、むずかしい!」「ジャコビニー

流星群ね」「そう、それつ」「見えるかしら」、再び上を向い

て捜している間に、「あー上ばかりみて首が痛いよ」とい

う言葉が出てきたので、フルートに合わせ「……ピッカリ、

ピッカリふえてくる」の歌をうたうことにします。天に届か

んばかりにうたったのに、その頃から雲が出はじめ、どうし

ても流星群は姿をみせてくれません。そこでとっておきの劇

を始める事にしました。物語は――

「昔、子どもが欲しいと望んでいた老夫婦に男児が授かり、

その子は遅しく育ち、サンと名付けられた。その頃、南山と

北海に竜がいて、二匹はある時桃の実をめぐる争い、天を

破ってしまった。おかげでサンの住む村には雹や石が落ちて

きた。サンは人々を救うべく立ち上がり、ライロン山の老人を訪ね案を授かった。苦難の末ウリユー山に辿り着き、山を揺り動かしてとうとう三番目の姫を得て、共に白い羊に乗り、竜を退治し、その牙や歯で天の裂け目を繕いながら空を飛び続け、それが銀河や星になった」というものです。

真暗な舞台に立つサンや人形は、サーチライトのスポットライトを浴びると一層素晴らしく、ギターの音色も効果的で、子どもたちは竜の真に迫った動きにこぶしを握り、ライロン山やウリユー山が揺れる毎に目を輝かせている様子が夜目にもはつきり見てとれる程です。二十数分間の、年少児には長すぎはしないかと思った劇もあったという間に終わりましたが、肝心の流星群がどうしても雲の中から現われてくれませんでした。それで、夜も更け少し寒くなったので、楽隊を総動員して、運動会で好評だったフォークダンスを輪になって踊り、おやすみの挨拶をして解散することにしました。後片づけをして幼稚園へ向かう私たちも、余韻を楽しみながら歌をうたい、フルートを奏でながら坂道を下って戻りました。

翌日、幼稚園では先生たちが昨夜の会に参加した子と、できなかった子との出会いをどう捕えて展開するかに配慮しました。けれど、私たちが考えていたより、子どもたち同士が

とても和やかに、真剣に交換しあっているのです。昨夜の物語の大方の筋をつかんだ年長児は、語り手となり、幾人かはサンや竜の役を自由に演じています。昨夜とは違った雰囲気を楽しむ子、時々「そこは足をどんどんさせて体当たりよ」と演出する子、初めてみる子は、隣りに座った年長のお姉さんの解説も合わせ聞きながら楽しんでます。観客も次第にふえ、その日はクラスの枠もはずしてみんなで劇あそびをして過ごしました。

「夜の保育」を思いついた時は、期待と不安感で一ぱいでしたが、みんなで心と力を合わせ、綿密な計画をたて、準備をすすめている間に不安も解消して期待だけがつのっていきましました。あいにく流星群という未知の自然現象を観る事はできなかったけれど、これを機に親子で天体について語り合う時がもたれ、自然に対する未長く続く関心が育ったのではないかと思います。星は出なかったけれど、参加した人みんなが楽しく過ごせたことですっかり満足して「さようなら」と言う事ができ、はっとしました。

少なくとも私には、あの「星をみる会」は、文字通り光り輝く星となって心の中にきらめいております。

(元・郡山市富田幼稚園)

## 星



星・星・星……満天に、あたかも宝石を鑲めたかのような星の輝きは、これを見る人にはそのおかれた環境の差異によつて、必然的に見方も違えば感じ方も変わつて来る。ただ無条件に美しいと感じたり、あるときには淋しいと思つたり、あるいはわけもなく何かを問ひかけてみたい衝動に駆られたり、日中のほてりの残つた夏の夜には涼しさの泉となり、凍てついた冬の星空は、そのままお腹の隅々まで入り込んでしまふのではないかと思える。

いずれにせよこの星空を見上げる時間、自己の心は星々の世界に融合されることだけはたしかなようで、一番簡単に味わたる無我の境地ともいえるものではないだろうか。

古来、天体についての年中行事としては、まず、子どもを主体とした七夕祭りが上げられる。これにまつわる呼び方も、星合・星迎・星の夜・星供・星の契・星の舟などとその数も多い。月、地球、太陽もすべて星であることには変わりはないけれども、あまりにも身近なためにこうした考え方は

忘れられがちである。

月については陰暦八月十五日の仲秋の名月を賞める観月の宴が代表される。十六夜・立待月・居待月・寝待月・更待月そしてこれを過ぎれば宵闇と、日一日を加えるごとにその月の呼び方が移り変わつてゆくのも意味深く、待ち望んだ名月が雨で見えなければ雨月と言いかえる。その一つ一つのありさまが脳裏に面白く描けそうである。

また、太陽については初日の出を拝することから、高山において望む御来光(御来迎)といったところが主なものである。

これらの他にその星々の情景についてみると、天の川・星影・星の国・星の宿・星月夜・星の林・初日影・日輪など、それに春先の朧月にいたっては、色々な花や気象との関連もあつてその柔らかさがまた格別で、こうした文学的ないろいろな言い表わし方がなされるのも興味のあるところである。

しかし、いま実際に肉眼で見える星の数となると、空気の汚れた地方ではせいぜい四等星までで、その数は約数百個

森 下 博 三

位、都会を離れて大気の清澄な田舎や海岸、それに高山へでも行かない限り肉眼で見るのでできる六等星まで見ることは、至難なことである。それでも約二千数百個位のもので、それ以上となると望遠鏡によることとなるわけで、口径八センチメートルの簡単なもので百万個、パロマ山の世界最大の口径五メートルでは、約二十三等級位までの非常に暗い星の写真観測が行なわれている。これは光が地球に届くのに五十億年以上もかかる遠い距離で、一等星の数億分の一の明るさしかないこととなる。

星の明るさは、大体一等星が一キロメートル離れたところにある一燭光の明るさに相当し、一等級ごとの差は約二・五倍位であるから、肉眼でやっと見える六等星は、一等星の百分の一位の明るさしかないことになる。いま、太陽の明るさをこの方法で計算すると、マイナス二十六・七等星ということになり、一等星の一千億倍の明るさということになり、満月は大体マイナス十三等星、金星はマイナス四等星ということになる。しかし星の本当の明るさを比較するためには、地球から三十二・六光年（ナバーセク）のところに勢揃いさせて見る必要があるわけで、これによって得られる値を絶対等級という。先程の太陽を例にとれば、実際には地球から一億

四千九百六十万キロメートル（一天文単位）しか離れていない、見かけの明るさはマイナス二十六・七等であるのに絶対等級では四・七等星となってしまう。地球から八・七光年の位置にあるシリウスはマイナス一・四等星から一・三等星に、アークツルスが〇・二等からマイナス〇・三等星に、オリオン座のリゲルは〇・三等からマイナス六・五等星に、見かけ二等星の北極星はマイナス四等星という結果になる。

# ☆

最近東京では、雨後の空気の澄んだときでもない限り、銀河は勿論のこと星座すら判別しにくいことは非常に情ないことである。

「ホラ、一番星が！」「どこ、どこに」

「アッ、本当だ」「やつ、二番星見付けたよ！」

空の彼方を、小さな目を一ぱいに見開いて星々を捜し求める子等には、星を通して親を見つめ、親は星を仲介として子等を見つめる。ほのぼのとした心のかよい。だれしもが一度は味わい経験することではあるが、このようなほんの小さな呼びかけが、子等には敏感にひびきはねかえって来るということ忘れてはならないと感ずる次第である。

（東京大学・東京天文台）

# ひとりひとりの子どもを見つめて ④

赤羽 美代子

今月は、直接、現場のお話ではありません。平凡に一人の間として生きてきた、私の一番身近な人の、ある日、ある時の様子を記すことに致します。特別に書き記す事柄ではありませんが、これらを通して、日ごろの保育をもう一度、考えてみたく思いました。

私の母は、去年八十八歳の米寿を迎えました。我が家に嫁してより、七十年の歳月が流れ去ったとの事です。幸い健康に恵まれ、我が家の食事の仕度、掃除、濯ぎ洗濯（頑固にも鹽なまを使用を本当に楽しそうに致します。特に洗濯の時には、あの子は最近忘れっぽいとか、あの子は浮かぬ顔をしていたがと、（注・あの子とは、母の子どもたちで、全員中年齢者）ひとりひとりの子どもたちのことを考えながら、濯ぎ洗濯をするのが楽しみなのだそうです。（親不孝者が、一夜洗濯物を水に

漬け忘れますと、翌日布が目染み入るように洗いがって、きちっと畳まれています）

ある日、母の曾孫（生後五か月）Sを一時間程、我が家に預かることになりました。母は目を細くして喜び、昔取った杵づかなのでしょう。Sをゆったりと懷に抱き込みました。Sは授乳後で気分は爽快の様子です。お乳の香を部屋いっぱいに漂わせ、曾祖母に抱かれ満足気に、年老いた老人の顔をじっと見つめるのです。母も大いに満足の様子です。抱きかかえたSの腰を、静かにポンポンと叩きながら「Sちゃん、お婆ちゃんね、じょうずにお歌が唄えないのよ。だからお話をして上げましょうね」と、昔話をポツリ、ポツリと語り始めました。

「昔、昔のお話ですよ。ある所にお爺さんとお婆さんがおりました。………。おやあ、大きな桃がドンブラッコ、ドンブラッコと流れてきましたよ」Sは身体力を緩ませて、曾祖

母の上で、いかにも僕聞いているの、という風情です。私も、いつの間にか母に抱き込まれた赤子のように、母の語るリズムの中に流れ込んで、二人の調和の世界に引き込まれてしまいました。「桃太郎さん、桃太郎さん、お腰に着けている物は何でもござる」母は、自分の身体を揺り籠にして、昔話を語ります。Sは時どき相槌を打つかのように、母の昔話に相の手を入れるではありませんか。こんな具合なんです。

「桃太郎さん、桃太郎さん」母は、Sが桃太郎であるかのようにSに呼びかける。(S・無心に口元をほころばせて、オックン・オックンと、相槌を入れる)「お腰に着けた物は何でもござる」(S・手足を宙に振って、ウー、ウーと声を出す)「お腰に着けた黍団子、一つ下さいお供します」(Sは、母の語る昔話の区切りに、間を外してはならじと、全身で母の語りかけを待っていたかのように小さな口を前に突き出し、目を丸くして、アブブ・アブブー)

私は、Sのそんな仕草がおかしくまた可愛くて、私まで母の呼びかけを待つ始末です。やがて昔話もいよいよ終局の頃、Sは心地よい興奮のためか、天使の誘いがあったのか、母の胸にポテリと頭を持たせて、ネンネのお国へ出発してしまいました。

ふと私は、タイムトンネルの中で遊んでいた自分に気づきました。私も母の懷の中にいて、赤子になったような錯覚に囚われていたのです。急ぎSを寢床に就かせますと、真赤な頬の寝顔を母はじっと見守りながら、Sになお語りかけています。「Sちゃんや、丈夫で大きくなるのよ。良い子だ、良い子だ」

私は、この平凡な時間の流れの中で、いつか、どこかへ置いてきた「大切な塊り」が、再び私の内に納まったような、満足感と安定感を覚えました。

そして、日頃の保育にこの事を帰して考えてみると、先ず、教師と子どもとが、木の枝と小鳥のように、花に降りそぐ慈雨のように、落ちて着いて満たされた子どもとのかかわりがあったでしょうか。母がSの幼い魂に宝庫をつくったような大切な時間と、必要な手間を省いてはいなかったでしょうか。むしろ、人材造りの教育に引きずられてはいなかったか反省させられました。

保育の学問からはほど遠いひとりの老母が、一片の保育の神髄を、人間同志の關係を通して伝えてくれたように思われました。

(靈南坂幼稚園)

# 米国の幼児教育における五つの実験(十)

大戸 美也子

## 一 デイ・ケアの変遷(続き)

### (3) 子ども・家族の保護・強化

#### 母子センター

母子センターは、国家の貧困対策の一環として組織された実験的デイ・ケアである。母親教育・訓練、子どもの身体的、情緒的、知的成長を確かなものにする活動、子どもとその家族に対する幅広い保健サービスの三つの要素から成り立っている。これは対象、方法、内容それぞれにおいて従来のデイ・ケアより複雑な(heterogeneous)ものであった。対象は子どもから家族へ移項し、

運営も保育者が単独に行なうというより、栄養士、保健婦、医者、ソーシャル・ワーカー、カウンセラーあるいは母親との協同でなしうるものと変わり、従ってその内容も単なる管理(custodial care)に留まらず多面的な活動をよく吟味して与えるものへと変化した。母子センターそのものは、特定のバックグラウンドを持った人々を対象とする小規模なプロジェクトであったが、この新しいタイプのデイ・ケアを実践に移したそのことが、デイ・ケアの新たな可能性を何よりも効果的に人々に伝えたといえることができる。

デイ・ケアの地平線が広がれば、議論は単に日中の世話(day care)にとどまらず、子どもの世話(child care)をどうするか、言いかえれば、誰がどういうやり方でアメリカの子どもの世話を

すべきか、という課題へ発展していった。こうした論議に火をつけたのが、デイ・ケアをめぐる共和党・民主党の政策抗争である。

### デイ・ケアに関する政策抗争

一九六九年一月、政権が民主党から共和党へ移項すると、教育・福祉の強調点もまた移動した。ニクソン大統領が新たに打ち出した児童に関する政策の基本線は、次の言葉に集約される。

「決定的なことは幼児期の成長であり、国家はすべてのアメリカの子どもたちに、人生の最初の五年間に健康で発達を刺激する機会を与えなければならない……」(Nixon, 1969 傍点は筆者)

児童の教育・福祉に関する国家的な努力を、特殊なバックグラウンドを持つ人々からすべての人々へ、また限られた期間ではなく、乳幼児期全体に拡張しようとするこの「宣言」は、前政権のそれと比べはるかに進歩的なものであることは認めなければならない。この宣言は、同年七月、保健・教育・福祉省に児童の政策を一本化する目的で新たに児童発達局を創設し、その初代局長にイエール大学の発達心理学ズィグラー教授が就任した以後、いよいよ実践に移されはじめた(Zigler, 1971 (a), (b))。八月には扶養家族援助法(Aid to Families with Dependent Children)その翌年には家族援助計画(The Family Assistant Plan)——別名「ホー

ム・スタート」計画をそれぞれ議会に送り、また一九七〇年十二月の「児童に関する白聖館会議」では、七〇年代の最重要政策としてデイ・ケアを採択する等、次々新しい施策が講じられた。しかし、少数与党の共和党の立案は、多数野党の民主党の対策に阻まれ必ずしもスムーズには実現しなかったのである。両者の主な争点は、共和党が貧困家庭の勤労・訓練意欲のある母親の援助を主眼とし、その子どもについては「個人的な世話・保護・監督」と定義されるような機会を与えるのに留めたのに対して、民主党が主として就学前児童と貧困家庭の児童を優先させながら、彼らに全面的発達を保障するすべてのサービスと親の訓練・援助を包含する総合的プログラムを主張した点にある(Updated Federal Day Care Legislation Chart, 1972)。この抗争が最も劇的に展開したのは、一九七一年の「総合的児童発達法」の時である。この法案は、当時上院の児童・青年委員会の委員長であった現副大統領モンデールらが、全米二十の教育団体の支援を得て起草し、圧倒的多数で議会を通過したのであったが、ニクソン大統領は拒否権を発動してこれを差し戻してしまっただけである。この法案は、再び圧倒的多数(七十三対十二)で上院は通過したが、下院ではついに審議されず廃案となってしまった(Mondale, 1971 (a), (b), 1972; Nixon, 1971)。この法案は、教育関係者の関心が高かった

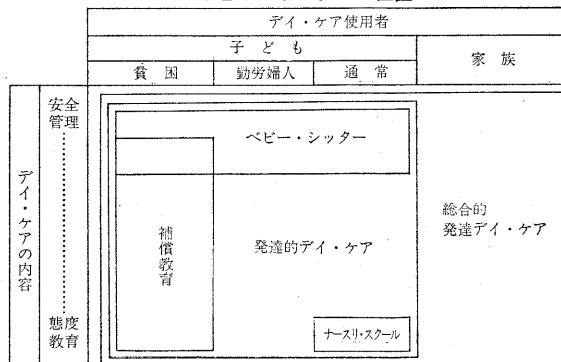
だけに、その後デイ・ケアのあり方をめぐって激しい論争が起こったことは言うまでもない。デイ・ケア・サービスの主な受け手は誰なのか、子どもか親か、デイ・ケアの主な内容はどんなものか、保護・監督か教育的・発達のなものか……等々こうした議論は今日もつづいているもので、最後の節で改めてとりあげることにする。

さて、デイ・ケアは今日、さまざまな立場からの要求に応えて、物理的に保育に欠ける子どもたちのため、質的に保育に欠ける子どもたちのため、子どもにより良い発達の機会を与えるため、国家の貧困対策のため……等々、その機能も、展開の場所も形も多様化しながら、独自の世界の形成に努めている。デイ・ケアがカバーしている領域を描いてみると下図のようになり、この広い領域の中で自在に位置を占め、さまざまな試行を展開している訳である。

## 二 デイ・ケアの展開

デイ・ケアの展開の手引きとして、一九七一年七月、児童発達局より八冊からなるガイド・ブックが刊行された(但し、第三巻―就学前児童の取り扱い―は七四年刊行)。そこでは「デイ・ケア・

発達のデイ・ケアの位置



サービスとは、十四歳以下の子どもに対して一日のある部分を、自分の家かそれ以外のところで世話をすること」(A Statement of Principles, 1971)と定義され、望ましいサービスとして子どもの身体的・情緒的・知的な発達を確かなものとする健康・栄養・社会的・教育的活動をあげている。このようなデイ・ケアが実際どのように展開しているかを形態別にみていくことにする。

## (1) 家庭内デイ・ケア

自分の家で母親に代わる人——母親以外の家族、親戚の人、近所の人、あるいはベビー・シッター等が子どもの面倒をみる最も個人的なデイ・ケア。この種のデイ・ケアは、親にとって便利ばかりでなく、子どもも自分の家で親しい人から個人的世話を受けられるという長所はあるが、施設で得られるような多面的なサービスは期待できない。友だち同士のつきあい、あそび場所、遊具、その他施設の面で劣るばかりでなく、保育を担当する人も殆ど訓練を受けていない場合が多いので、保育の質は必ずしも高いとは言えない。しかし連邦政府の調査によれば、保育に欠ける子どもの半数がこのような状況の中で日中を過ごしているといわれる (Keyserling, 1972)。

## (2) 家族デイ・ケア

一般的には、個人の家で六歳以下の子どもを小集団で保育するデイ・ケア。子どもの年齢および心身の状態によって定数は変化する、例えばペンシルヴァニア州 (1976) では、乳児三、三歳未満児四、就学前児童七と規定されている。この種のデイ・ケアは、センターより施設・指導の面で劣るとしても、(1) 家庭の雰囲気に近い保育環境は幼い子どもあるいは障害を持った子どもにはむしろ望ましい。

(2) センターよりも安上がりでデイ・ケア・ニーズを満たすことができる。(3) 保育者の現場訓練がしやすい、等の理由により、米国では高く評価されている (Cohen, 1974)。この種のデイ・ケアの利用者は、全体の十五パーセントを占め、施設によって質に大きな格差のあることが指摘されている。

同じく家族デイ・ケアの範ちゅうに入るが、主として貧困家庭の母子を対象に専門家が「出かけ保育」を展開しているものがある。これは実験的試みであったり、大学付設のデイ・ケア・センターの活動の一部であったりして数は少ないが、母親の教育的潜在力の開発によって、子どもは継続的效果を受けることが明らかとなり、近年この種のプログラムは注目を受けている。特に成功をおさめている組織的プログラムを三つ簡単に紹介してみよう。

### イブシランティ訪問教授プログラム

ミシガン州のワイカートが開発した認知発達をめざしたプログラムの原理を、家庭での指導プログラムへ応用したもの。一週一度、一時間教師が家庭訪問し、子どもには認知発達の基礎を、母親には言語力、指導力、育児技術を身につけさせる。五つの領域——製作、ごっこあそび、知覚弁別、分類、言語——から成るカリキュラムにそって一対一で指導し、母親が側でこの過程を観察

する。母親には、この他週の残りの日を子どもと一緒に使う教材の扱い方や活動について教授される。このプログラムは、子どもの認知発達に有意な影響を与えること、また子どもへの暖かい態度、言葉のコミュニケーションの二つの因子がこれにかかわっていることが分析されている。

#### 母子家庭プログラム (MCHP)

ニューヨークのレーベンスタイン等が、言語の獲得は子どもの知的発達的基础となるという仮説のもとに開発している実験的プログラム。このプログラムは、(1)母子一組に直接に指導する、(2)玩具模範演者 (Toy Demonstrator = TD) が、選ばれた本や玩具を母子に示す、(3)言語を媒介に相互作用の発生しやすい本や玩具の刺激物を注意深く選んでいる、(4)物の扱い方を発展させたり、個々のケースに即してTDの行動をチェックする、という要素から成りたっている。このプログラムに参加した子どもたちは、教育にその成果があらわれる程IQと言語得点をあげ、しかもそれが小学校進級後も保持されることが最近の継続研究 (Leventain, et al., 1976) でも確かめられている。しかしこのプログラムは(1)すべての効果が模範演技の順序性に依存していること、(2)順序性を厳密にすればそれだけ専門的能力が必要となり、権威的なものと

なりかねないこと、(3)そのことが母親を受動的な受け手にしたてる恐れがあること、等の問題も指摘されている (Cohen, 1974)。

#### DARCC訓練プログラム

このプログラムは前二つと異なり、主として家庭訪問者 (指導者) の訓練を旨とするもので、テネシー州のジョージ・ビーボディ教員大学で開発したこの種のプログラムとしては、先駆的なプログラムである。DARCCには、特別の構造化されたプログラムはなく、個別の事例に即して保育者の「態度」と「保育技術」を発展させるところに特色がある。家庭訪問者は、訪問家庭の実情に合わせて毎日活動のねらいをたて、その実現方法について細かな助言が与えられる。評価はその日の目的との関係で行なう過程評価を重視している。このプログラムの成果の一つに、家庭内の年少の子どもの学習意欲を高めることがあげられ、これは「垂直的浸透」現象として知られている。

この他、感覚運動的発達を重視したフロリダ大学のゴードンの開発した家庭訪問プログラム、アパラチアの過疎地にすむ母子を対象に、子ども向けのTV番組 (セサミー・ストリートとかキップン・カンガルー等) を使ったクリンチ・パウエル・ホーム・スタート・プログラム等がある。

(3) 施設でのデイ・ケア

家庭以外の施設で、十三人以上の子どもを複数の有資格の保育者が保育するデイ・ケア。これには無料と有料の二種あるが、前者のものとしては、教会、慈善団体、連邦政府の出先機関としてセトルメントで開設しているデイ・ケアがこれに該当し、残りの民間のデイ・ケアはすべて有料である。キーサーリングの実態調査 (1982) によれば、保育料の平均は週十八ドルで、家族の年収は四千ドル以上の者が全体の四分の三を占めている。しかし、子どもの定数、施設、設備など国の設置基準を満たしているセンターは一パーセント以下であるという。最近のデイ・ケア・ブームによって、少しは建物その他は改善されたかもしれないが、同時にデイ・ケア・サービスを求める人々も増加しているので「同じ場所にとどまるために、大急ぎで走っている」(Keyserling, 1971) という表現が、今日の米国のデイ・ケアの実状を最も雄弁に言えているように思われる。

三 デイ・ケアの問題点

デイ・ケアのカバーする領域が広がり、その中に、小人数の子どもたちの世話を主眼とした極く零細なものから、家族全体の世

話、訓練を目ざした大掛かりなものまで、また単に管理、監督だけを不完全ながら行なっているものから、子どもの全体的な発達をより確かなものにするため多面的なサービスを与えているものまで混在している姿は、米国の縮図である。米国のデイ・ケアは規模においても質においても、我が国に比べ格差が激しいので、これを一般化して述べることは殆ど不可能に近い。ピーターズ (Peters) は、このあいまいさ、言い換えるなら柔軟性を反映した不確かさこそ、米国のデイ・ケアの問題の核心であり、また将来への約束を示すものであると指摘している。従って、今日の米国のデイ・ケアが直面している最大の問題は、ますます広がっていくデイ・ケア可能な世界のどこに位置を占めるかということになりそうである。一体何を基準に、何を根拠としてデイ・ケアの望ましい「位置」を判断しようとしているのだろうか。例えば、最近激しく議論されている次の項目は、望ましい保育の場所を求めるときの要素(基準)となっているようだ。

1、デイ・ケア・サービスは「誰」のためにあるべきか。——  
子どもか、家族か。

2、デイ・ケア・サービスの「内容」は、基本的に管理・監督でよいのか、それとも教育的・発達の的なものであるべきか。

3、デイ・ケア・サービスはどのような「方法」で手渡すべき

か。——家庭か、施設か。

これらの問題はさらにいくつかの関連する問題を内包しており、例えば第一の問題には、どういう状況にある子どもを、何歳位から何歳位までみていくのがよいか、また、家族とは誰を意味しているのか等、具体的な問題が随伴している。望ましい保育の場所決定には、まず第一に、適切な基準の設定が必要のようである。

次に、何を根拠に一定の座標点を決定すべきか。調査データか、イデオロギーか。米国の場合、子どもの世話は個人的な営み、従って国家が特定のイデオロギーをもってこれに介入することについては、受け手の側も与え手の側も一種の不安感をもっている。このムードがデイ・ケアの普及・充実に遅らせ、また公の援助削減を正当づける手段として政治的に使われる場合もあるが (Baumrind, 1973; Peters, 1975 (a)(b)) 検討に値する問題である。根拠の性質によってデイ・ケア運動の速度は調整され、望ましいデイ・ケアの形が異なったものとなってくるからである。

我が国では「幼・保一元化」運動が久しく展開しているが、三十年にわたる論争によってとれだけこの運動は進歩しただろうか。この望ましい保育の「場所」を探索する運動は、これに参加する人が使っているコンパス(基準)とエネルギー源(根拠)と

を明らかにするところ、さらに有機的に展開するのではないかと考えられる。

(つづ)

## 文 献

1. Addams, J. *Twenty Years at Hull House*. N.Y.: New American Library, 1910.
2. Baumrind, D. Will a Day Care be a Child Development Center? *Young Children*, 1973, 28 (37), 154-169.
3. Caldwell, B. H. Day Care: A Timid Giant Grows Bolder. *The National Elementary Principals*, 1971, 51(1), 74-78.
4. Cohen, D. J. *Serving for Preschool Children*. Washington, D. C.: Office of Child Development, 1974.
5. Day Care: A Statement of Principles. Washington, D. C.: Office of Child Development, 1970.
6. Fein, G. G. and A. Clarke-Stewart. *Day Care in Context*. N.Y.: Wiley, 1973.
7. Forest, I. *Preschool Education: A Historical and Critical Study*. N.Y.: Macmillan, 1927.
8. Hunt, M. 「乳幼児教育の10年をふりかえって」(波多野他

- 記 金子書房, 1976)

9. Hymes, J. L. *Early Childhood Education: An Introduction to the Profession*. Washington, D.C.: NAEYC, 1975.
10. Keyserling, M. D. Day Care: Crisis and Challenge. *Childhood Education*, 1971, 48 (2), 56-67.
11. \_\_\_\_\_. *Windows on Day Care*. N.Y.: National Council of Jewish Women, 1972.
12. Levenstein, P. et al. Longitudinal IQ Outcomes of the Mother-Child Home Program. *Child Development*, 1976, 47 (4), 1015-1025.
13. Mondale, W. F. Day Care: Education or Custody? *The National Elementary Principal*, 1971, 51 (1), 79-83.
14. \_\_\_\_\_. Children: Our Challenge. *Young Children*, 1971, 27 (2), 75-81.
15. \_\_\_\_\_. Legislating Child Development. In M. W. Edelman (Ed.), *Perspectives on Child Care*. Washington, D.C.: NAEYC, 1972.
16. National Association of Day Nurseries, Inc. (NADN). *Historical Sketch of the Day Nursery Movement*. N.Y.: NADN, 1940.
17. Nixon, R. Special Message to the Congress on the Nation's Anti-Poverty Programs. Public Papers of the President, 55, Feb. 19, 1969.
18. \_\_\_\_\_. Veto of the EDA of 1971. Public Papers of the President, 387, Dec. 7, 1971.
19. Pennsylvania Day Care Resitration, 2-5-8. Penn. Harrisberg: Pennsylvania Day Care Advisory Committee, 1975.
20. Peters, D. L. Day Care: Never. Day Care (1975) の授業の資料。
21. \_\_\_\_\_. Day Care: The Problems, the Process, the Prospects. *Child Care Quarterly*, 1975, 4 (3), 135-139.
22. Up Dated Federal Day Care Legislation Chart. In M. W. Edelman (Ed.), *Perspectives on Child Care*. Washington, D.C.: NAEYC, 1972.
23. Zigler, E. Contemporary Concerns in Early Childhood Education. *Young Children*, 1971, 36 (3), 141-156.
24. \_\_\_\_\_. Learning from Children: The Role of Office of *Child Development*. Childhood Education, 1971, 48 (1), 8-11.

# 私の保育



河井祥子

“私の保育”ここに私が書こうとするものは真に“私の保育”でしかなく、他に通用するものでもないし、読んでいただく価値のあるものでもないと思う。あえて、私の十年の幼稚園生活の区切りとして、その背景になるものから書いてみることにする。

## 私のうけた幼児教育

もう二昔以上も前にこの幼稚園（お茶の水女子大学附属幼稚園）の支園を、二年間の

幼稚園生活を終えて出ていった。春の陽がやさしかった。また、帽子をかぶりステッキを持った倉橋惣三先生に、頭を軽くおさえられ、「大きくなったね」のお声もやさしかった。その声が幼稚園生活のすべてであり、今でも残る最高の贈り物であった。

この二年間の園生活を現在になつて思い出してみることは、そうたやすいことではない。担任の先生が作ってくださったアルバムが、かすかに記憶を呼び覚ましてくれる。私にとって幼稚園生活はあまり楽しいものではなかった。ほとんど一人ひょうひょうと遊んでいたらしい。今でこそこういう仕事をして、多くの方々と交わり、お付き合ひする機会が多くなり、そうすることに慣れてはきたが、今でも好む方ではない。現在の幼児の姿をみていても、同じようなタイプの幼児をみることもある。彼等の気持ちがわからないでもないのである。

そんな日々の中で、登園することがうれしかった目がある。それは、家の庭に咲いたコスモスやダリヤの花を、束にして持っていくこと、それを先生が喜んで受け取り花瓶に生けて下さることであった。言葉で

表現できないことを、花束に託したのかも  
しれない。

たびたびお弁当を持って大学のグラウンド  
へ小遠足をした。その道順は記憶にない  
が、そこで思いきり遊べたのがうれしかっ  
た。

その頃から、運動会、おゆうぎ会のような  
催物は、人一倍苦手だった。何しろ、最  
終学校を卒業するまで、とうとう人前で話  
す、歌う、演ずることは最大の苦痛となっ  
た。何しろ目立つことがきらいだった。そ  
んな私であるが、何か認めてほしいと思っ  
たこともあった。卒園間近のある日、最も記  
憶に鮮明な事件が起こったのだ。お帰りの  
時である。先生は紙芝居をして下さってい  
た。もちろん私たちはこれを静かにみてい  
たのであるが、私はグラグラしてきた歯が  
気になって仕方がない。思いもかけず、そ  
の歯がぬけてしまったのである。初めてぬ  
けた歯、ビックリしたと同時に反省もし

た。皆が静かに紙芝居を見ている。このう  
に何としたことか……。子ども心に気がと  
がめ、もじもじしていると、先生は「様子  
ちゃんいらつしやい」と私を皆の前へ立た  
せた。内心ドキドキである。「様子ちゃん  
のこの歯は赤ちゃんの歯で、次に大人の歯  
が生えてくるんですよ。お家へ帰ってお屋  
根にあげましようネ」とポケットの中に入  
れて下さった。この何でもない事が、私の  
記憶に残る事件になったのである。注意さ  
れて然りのこと、にもかかわらず、やさし  
く扱って下さったことを感謝するのであ  
る。私のようにあまり気持ちを出さない幼  
児に、先生は気をつかわれたことだろう。

ある日、お手洗いのことで失敗をしたの  
である。自分ではとても処理できない。し  
かしはずかしくて先生には話せない。部屋  
の入口の柱の陰に身をひそめる。先生に気  
づかれるのははずかしい、が、気がついて  
もらわなくても困る複雑な心境なのであ

る。まもなく気付かれた先生は、何も言わ  
ずに私を流し場へ連れていき、新しい下着  
と取り替えて下さる。それを新聞紙にくる  
みひもをかけ、お帰りの時「ハイ、おみや  
げ」と渡して下さった。家に帰り「今日幼  
稚園からおみやげもらっちゃった」と家の  
者に話し、この失敗も後まで尾を引くこと  
なく済んだのである。これも先生の処理の  
仕方に感謝する一コマである。私のような  
ヘソ曲りを、一早くのみ込んで下さること  
が、何よりの救いになったのだと思う。幼  
稚園というところは、私一人幼児ではな  
い。千差万別、それぞれ個性を持っている  
わけだ。それをどう理解していただけたか  
で、その幼児の幼稚園生活が生きてくるの  
であらう。

私の受けた幼児教育を否定することはで  
きない。否、幼児教育のみではない、人生  
を否定することはできないし、してはなら  
ないのである。何故なら、一度しかない人

生であり、その一部の幼児教育・幼稚園生活なのだから……。

園庭のプラタナスの幹に顔をつけて泣いた時、プラタナスのあの木肌が無気味だった。今でも熱を出すと、その木肌が夢の中によみがえる。

### 私の学んだ幼児教育

“桜草にまがうや若きひとのかげ” 当時のお茶の水女子大学附属幼稚園の園長先生であつた坂元彦太郎先生にこのうたをいただき、母校である附属幼稚園教員養成所を後にする。卒業して約十年、若さの失われた自分を省みる今日このころである。

この二年間の学生生活は、みごとに自由であり、人間の生きる場があつた。幼稚園にはほとんど毎日入りびたり、幼児教育を肌で感じとっていった。皆が貪欲だっ

た。授業はサボっても幼稚園には出かけ、先生方の一挙手一投足を盗みとろうとしたのである。仲間が集まり、保育の話題が出る。○○先生はこうなされた、△△先生はこう、次々と例が出される。それをまた、幼児の場面で確認していき、自分なりに作りあげていく。そんなことの繰り返しだった。毎日保育室の掃除に出かける。授業を終えてこの仕事は確かにイヤな時もあったが、そこで得ることはたくさんあった。ただきれいに美しくすれば良いのではなかった。この部屋は幼児が生活し、活動する場であることを教えられた。ただの応接間ではないのである。昨日、今日、明日と続いている今日の掃除なのだ。時間から切り離し、幼児から切り離しては、いくら美しく飾っても死んだものとなってしまうのだ。私よりもっと昔の実習生は、四つん這いになってふき掃除をしたそうである。私のころは棒雑巾に変わっていた。便利になると

いうことは、どうも心までが省略されていくような気がしてならない。

はずかしい話であるが、学生生活の記憶、学んだことはこの位しか憶えていないのである。他の保育技術的なこと、実習（研究保育等もしたのだが）も、自らの力の無さを反省するのみで終ってしまったらしい。このことは実際に就職してみても、こんなはずではなかった、という形ですべて新しい体験として、目の前に立ちふさがることとなる。

### 私の体験した幼児教育

#### 就職したのころ

誰にでも、何をして、必ず“初め”がある。それは振り返ってみると、貴重な体験なのであろうが、当人にとって、その時

点に於て、初めて故の悲哀に満ちるのである。

私は、幸いにも、両親の営む幼稚園で初めての幼児教育者としての出発をする。幼児教育者等と大それたことを書く資格はないし、おこがましいことではあるが、「幼稚園の先生」というのもちょっと恥ずかしい。

例のごとく入園式の前は、雑事を消化するの忙しい。時間を作つては、新入園児の名前を憶えようと努力をする。しかしそれは徒勞に終わる。何故って、生きている子どもと実際に向き合ったその時、はじめてその名前が生きたものとなるのだから。

入園式、その時から、幼児、父兄（特に母親、私（教師）との歩みが始まる。が、新前の私にとって、それは戦いでしかない。故に、その余裕の無さは悲しい限りである。振り返ってみると、滑稽な、まことに恥ずかしいことなのである。例えば、父

兄に對しどう偉そうに見せるかというところ、親に負けてはなるまい、年齡的にはもちろん、社会的経験も豊富である。この歳（幼児の）まで子どもを産み育てたという経験は大きい。もししたら机上のものであるかもしれないけれど、私の学んだ幼児教育を、それに流されてはいけなさと、幼児との触れ合いの中から、一つ一つ体験してみた、それ故の戦いであつた。その戦いが無意味なものとなつていくのであるが。——というのは、幼児と教師のみで手をつないでいても成長しないのである。そのつながりが親を含め、円となつていかない限り。

幼稚園の生活は、一方的に押しつけられるものではないらしい。それを基本に毎日を送ることとした。故に、遊ぶことに全力を投入したが、その難しさ。学生時代、実習にいったところの先生に、「何もできないんです、遊ぶことしか」と申し上げた

ら、「遊ぶことができれば良い先生になれますよ。一番難しいことなのですから」と言われたことを思い出す。今から思うとよくも「遊ぶことができる」と言えたものだ。一人ではない、集団が相手なのだ。その集団も画一のものではない。乱暴あり、メソメソあり、それぞれが一日を楽しく過ごさねばならない。肩の荷が重い。こちらは一つも楽しくない。遊んであげる、楽しくしてあげるといふ、一方向へのみ、気持ちが向いているからだろう。この関係で良い保育が生まれるはずがない。分かつてはいても、がんじがらめになつていく自分を悲しむだけである。そして、そこから脱け出ようと、まったく体当たりの保育が何年かつづく。

何年か経つたある日、頑張つた保育が定着しはじめたころ、学校時代の友人に子どもが生まれる。その友人はもちろん幼児教育とは関係のない大学に進み、また元来母

性的な方ではない人間である。ところが、自分の子どもにかける言葉かけ、あやし方、むずかった時の処理の仕方、母親なのである。あの何もわからない子どもに言葉が通じていくのである。私は目の覚める思いがする。いったい今までの私と幼児との関係は何だったのかと……。初めての親から離れた幼稚園生活を、もっと母親の付き合いからはじめることにより、教師でしかなかった私と幼児の関係が、もっと近づいてくるのではないだろうか。

洋服が汚れたら洗ってあげる。コートのボタンをはめてあげる。できないことがあったら助けてあげる。お弁当の仕度、後片付けを手伝ってあげる。できてしまえば何でもないことであるけれど、それによって幼児と教師との関係ができ上がっていく。洋服は汚れているよりきれいな方が良い。しかし、きれいにただすれば良いのではない。そこに母親のような関係が生まれる

ことの方が大切なのではないだろうか。当然できる年齢があったり、できる幼児がある。が、ちょっと手をかけてあげると、こっと見上げるあの笑顔が何ともうれしい。

そんな幼児との触れ合いを楽しみながら、いわゆる、六領域と呼ばれる保育内容にも、何かはつきりつかめない疑問にとりつかれる。歌をおしえる、絵をかかせる、製作する、ひとしきり遊んだあと、何かしてみようかと前もって用意したものを出してみようとする。だが幼児の遊びを見てみると、四月入園時から一学期中は、やっと園の生活に慣れつつあるところ。もちろん個人差はある。そのまったく一つの方法で活動を押しつけられるだろうか。やっと楽しくなった幼稚園での遊びの中で、遊びをより充実させ得ないだろうか。こちら側から与える一つの活動をするよりも、個々に充実させていくことの方が大切なのではあ

るまいか。しかしそのゆとりのあるのは、二学期半ば頃までで、運動会、学期末、学年末、進級、進学となると、あせってくる。そこで平凡な教師になり下がり、頑張ってみるのである。ふと我に返った時は、そこには何も育てないことをさびしく感じながら……。

#### 障害児と共に

就職して三年目、偶然に、ということとは、全く普通の幼児と同じグループの中から自閉的傾向を持つ幼児と出会った。入園当初は他の幼児も泣く者が往々にしてある。その中の一人にすぎなかったのであるが、日を増すごとに離れた存在となっていた。こちらがやっとそれに気づき、何か異質のものを持っていることを知ってから、その幼児と、教師、他のクラスの幼児との関係に、スムーズさが生まれてきた。これ等障害児との出会いは、前に本誌に載

せて頂いたことがあるので省略させて頂く。

この出会いで私自身一番学んだことは、障害を持つことそれ自体を打ち消すことはできないということ。もちろん、それをより軽度にする努力と、それを目的に教育治療することも必要であるが、それよりも、それそれを背負って生きていること、そのことを認めること、つまりそれを個性として認めるということ、その上で保育が成り立つのではないかということ。これは、一般に行なわれる保育にもいえることだと思う。それは、その幼児を格付けけることでは決していないということを一言付け加えておく。

#### 今の保育

十年も同じ仕事を続けていると、子どもは常に新鮮であるのにもかかわらず、私自身もその出会いに新鮮であろうと努力する

のにもかかわらず、自然とあるパターンの上に生活し、より無駄のない生活をしようとしている。ふと我に返ると、反省させられることがある。今までの出会いでの失敗、こうすれば良かったということなど、その時の幼児の姿をはっきり見ずして、パターンにはめようとする。幼稚園というところは、確かに自由でなくてはならない。けれど同時に集団でもある。集団に於ては他人に迷惑をかけることは最小限にしないといけないというのが私の心情である。故になるべくそういう機会を少なくすること、特に入園当初はさける努力をするが、皆でお話を聞く時、お帰りの時など、どうしても静かにしてほしい時がある。(もちろん、この時も例外はあげきれないほどあるのだが)片付けもその一つである。他児が片付けている時に遊んでいるのは許されない。これもやはり注釈をつけなければならぬ。その状況、その幼児の状態等により画

一にはなかなかいかないものである……。しかし基本的には、そのような集団であることによりルールが生まれ、それに自然に従うことになる。

幼児教育には経験などというものが通用するものとは思っていなかった私が、ふと顧みると、いかに慣れによって言葉たくみに、それ等のルールの上に幼児をひき廻していたかに気づく。もっと自由でなければならなかった幼児の生活を、こんな形で一方向に引っ張ってしまっているのではないかという不安。かと言って、まったく無秩序に、まるで動物園のごとき幼稚園の生活にも疑いを持つ。幼児とぶつかり合うことにより、教師の試行錯誤がはじまる。これは幼児が生きている限り、止まることなくつづくことであろう。また皆が同じパターンの人間とならない限り。

#### 今日一日の保育

登園してくる幼児を迎えるため、少し早めに教室へいく。そこへ男児二人が登園してくる。Aは元氣よく入ってくるが、もう一人Bは半ベソをかいている。すぐに「どうしたの」と声が出る。母親から「Aちゃんの靴箱のふたが、頭に当たったんです」こちらは、どうしても母親がいると言葉がでてこない。「Bちゃん強いからもう大丈夫よね」もちろんBはすっきりしない顔、そう痛くはないらしい。Aをうらめしそうに見、母親に八つ当たりをしている。Aはお手洗いへ、続いてBも。しばらくすると二人笑顔で廊下から部屋に入ってくる。私の関知するところではなかったらしい。いつものように、何やら楽しそうに話をしながら、部屋であそぶ。彼等の遊びは、もうそこから始まっていたのである。

B「ネー、ここにおくつぬいでもいい

の？」

A「いまお玄関つくっているところ。ちょっと待ってて」

B「なーんだ、ここがお玄関かとおもっちゃった」

つみ木を持ち出して何やらどンドンできていく。

B「このながいところは僕たちの入るところ。ネェー。ここは先生の入るところにしようか」

A「そうしようか、ネェー、先生入ってくれる？」

私「入れてくれるの。じゃ、この御用が済んだら入れていただくわ」

この御用とは、決して今しなくてはならないものではない。すぐに入れてもらうだけの腰の軽さと気持ちの軽さがなくなったことは悲しいこと。ここにも一つ反省の場面を見る。

そこへ外で遊んでいたC子がやってく

る。急に外で遊んでいる幼児が気になってくる。今までの遊びをちょっと失礼して、外へ出てみる。三月と言えども日陰の寒さは身にしみる。その寒いスベリ台に、お家を設定し、何やらやっている。

E子「いらっしやいませ。お茶をごちそうしますから、どうぞ」

私「どうもありがとうございます」

とは言ったものの、こんな寒い所に長くいられるものではない。

私「また参りますので失礼致します」

E子「もうすぐ。いまF子ちゃんが作っていますから」

枯草をこまかくしてお茶わんに入れている。

私「この次ごちそうになりますね」

と適当なことを言って、早々にその場は退散。部屋に戻ると、C子が待ちうけて居り、「レコードかけて」。ここ何週間かつづいている「七匹の子やぎ」の音楽劇である。

これは、かけ始めると切りなくかけさせられるので、こちらも今回はうわ手に出る。「一回だけね」これは、このクラスのほとんどの幼児が好むもので、レコードになると、その持ち役持ち役（これは自然にでき上がったしまって居り、お母さん役、子やぎ役はたまにダブルキャストになることはあるが、他はあまり変動がない。オオカミ役は常に私で、誰もこればかりはなり手がない。しかしこのオオカミ役も幼稚園だけのことらしく、家へ帰ると、家の者をやぎに仕立て、自分がオオカミになって、私とそっくり同じことをするのだそうだ）で登場してくる。最後の水におぼれたオオカミを助けるのがうれしいらしく、おぼれる前に助けてくれたりすることもある。最後に楽しく皆でおどってこのげきも終る。

もうお弁当の時間である。片付けなくてはならない。部屋中、〇〇ごっこの家と、七匹の子やぎの舞台になってしまっている

のだから、また教師の悪知恵を働かせる。ポツポツ片付けている幼児の手を止めさせ、「ヨーイ・ドンと言ったら片付けるのよ。どなたが一等賞かしらね」一呼吸置いてから「ヨーイ・ドン」早いこと早いこと、見る見るうちに片付く。もちろんこちらにも負けてはならない。私だって一等賞になりたいのだから。外からも荷物が片付けられ、運ばれてくる。一応全部片付いたわけだ。「いただきます」の挨拶をすませるまで十分余りだ。おどろいたものだ。でも余りこの手はつかいたくない。何故って？ おわかりいただけるでしょう、この気持ちこそ……。おばさんが、私のお茶を運んできてくれる。「早いこと、今片付けていると思っていたのに」F子「おばさん何ていったの」私「お片付けが早くておりこうさんですって」F子、にこっと笑う。

お弁当はいつもよりにぎやかなへう。もうこの時期に入ると、ほとんどの幼児がお

弁当を自分でつつんで片付ける。それでも早く遊びにいきいたい時など、「先生、つっんで」「先生、入れて」と言ってくる。

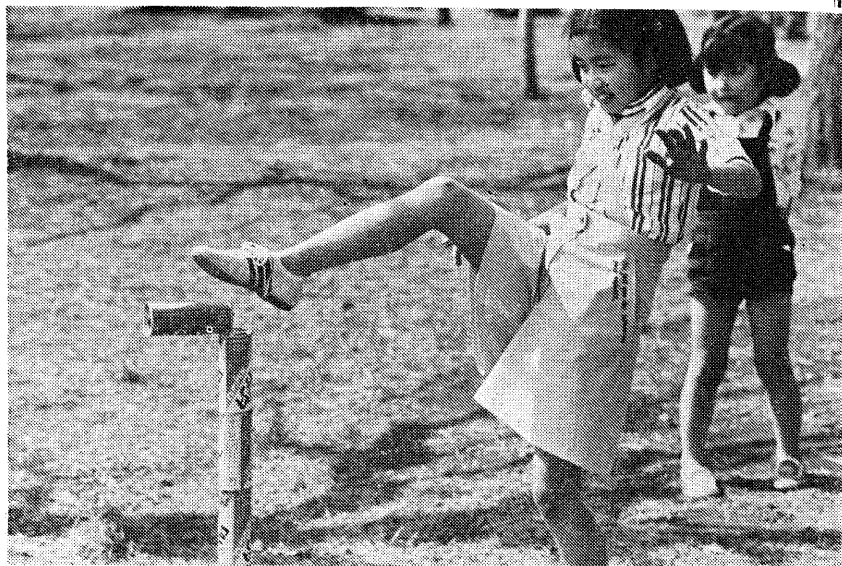
体操をし、一日が終る。皆で園庭を行進する。ふとみると、何とやらだら歩いていくことか。その時、私自身の歩き方を反省する、もっと楽しく歩きましょうと。

(一九七七・三・七 三歳児十六名)



# カ　ン　カ　ラ

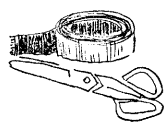
写真撮影 西本 真





# 星について

はじめに



みなさん、<sup>はらみ</sup>帯星つまり<sup>すいせい</sup>彗星をごらんになったことがおありでしょうか。私自身も、実は本当に肉眼で見えるほど大きなものは見たことがないんですが……。

ハレー彗星というのが有名ですね。それに、『戦争と平和』に、ピエールが<sup>はらみ</sup>帯星を眺めて非常に感慨にふける場面がありますが、ああいう大きな<sup>はらみ</sup>帯星が天にかかっているというのは、おそらく非常に何か強い印象を与えるものなのでしょう。

私が天体を見て強い印象を受けた記憶の一つに、丁度皇太子殿下がお生まれになった年でしたが、火星と金星が月に入った時です。それが一つの印象深い現象でした。

おそらく、原始的な、空気がまだ澄んでいた頃、人類がこ

柳 瀬 睦 男

うして空を眺めて、いろいろな感慨にふけたことは、想像にかたくないと思います。

例えば、聖書でも、神がアブラハムに、「テントから外に出てごらんさい、この星の数のように沢山の子孫ができる」と告げられたりがあります。西欧の文化圏では、天体は霊的な物体であって、地上のものと全く違っている、従って動きは完全である、という思想がありました。完全とは何かと言いますと、円運動をするはずだということです。それから先は非常に美しい夢が描かれていて、天球というのは、ガラス玉みたいなものであって、その上に天体がはりついていて、それがお互いに動くので、こすり合って天体の音楽が奏でられるということが考えられていました。

天体というのは、星も月も、太陽も含めて地上の物体とは違うものだという気持ちですが、昔からあったと思います。今で

も子どもたちはそう思っているでしょうし、大人も少しロマンチックになれば、星とか月とか言うのは、何か我々と違った物であるということを考えがちになるからだと思うのです。

### 自然科学の発達でわかる宇宙の不思議さ

ところが自然科学が発達してきて、一番大きな変革は、天体が地上の物体と同じものだということがわかったことです。それと、天体は円運動をしていないということ。観測の結果、一般的には楕円運動をしているということになった。

コペルニクスは非常に敬虔なキリスト教徒でもありましたが、人間として立派な人であったようですが、その彼がまず最初に、天体とは地球が真中にあるって天体と地球は全然別なものである、というそれまでの考え方を変えるきっかけを作ったのです。その後ケプラーが出て、ケプラーの三つの法則というのを見つけて、円運動をしていないと言いつつ、やはり円運動をしていないと言いつつ、非常に躊躇したようです。つまり、今までの考え方をがらっと変えてしまわなければならない。しかしそうしなければ、今までの実験結果は説明できないので、踏み切ったのだと言われています。そ

れからニュートンによって、天体もやはり地上の物体と同じものだということが証明されたのです。

もちろんその頃はまだ、天体が何からできているかはよくわからなかったのですが、それから何百年かかって、結局、地上の物質は九十何種からの元素でできていて、組成はいろいろ違うけれども他の天体でも地上で見られない元素はほとんどないということが、はつきりして来ました。現在では、御承知のように、数種類の安定な素粒子が集合・離散してこの宇宙はできているということになったわけです。

### ☆

このように自然科学が発達してくると、まあ、非常に夢がなくなり、つまらなくなっただけですけど、しかし一方では、新しい夢も出て来ました。

その一つは、私の考えでは、例えば宇宙には始まりがあったか、というふうなことです。

一九三〇年頃に、ハッブルという人が、宇宙は天体の全部が外に向かって爆発的に膨張していると、観測の結果言い出しました。それだったら逆にたどっていくと、宇宙には始まりがあって、今から何億年前には宇宙は原始的な固まりであって、それが爆発的に広がって今のような宇宙になったと

推論されるわけですね。

炭を熾<sup>も</sup>すと始め真赤になりますね。けれどもそのまま置いておくと、だんだん冷えてきます。すると最初の赤いのがだんだん赤黒くなって、ついに光が見えなくなつて、ただぬくもりだけが残る。宇宙も最初にもすごい爆発をして、高い温度になつて、それがだんだん冷えてきて、今そのぬくもりが残っているということがわかりました。逆に言うとな今の程度冷えているから、どの位前には真赤だったかということが大体わかるわけでしょう。それと、星の遠さかっているスビードから逆算して、大体百億年前に大爆発をしたのではないかといわれているのです。

その推論に対しては、まあいろいろな議論もあるのです。その最初の固まりができる以前はどうなっていたのか、などということもあるわけですね。それは、今までの物理の知識を動員しても、全然わかりません。

でも、やはり最初に大爆発があったことは考えられる。その時に、今、宇宙のあらゆる物を作っている素粒子が生まれて来たと考えられます。ですから私たち人間の身体も、最初の爆発の時できた素粒子がもとになっているわけです。要するに、私たちの身体も、宇宙を作っている素粒子から生まれ

た、すなわち「私たちも空から生まれた」ということになるわけですね。

自然科学の発達によつて宇宙から夢がなくなったといいますが、こう考えてみると、「散文的な」自然科学の結果から出て来た新しい「散文的でない」話だと思うのです。

#### ☆

私が小学生の頃、やはりSF映画がありまして、宇宙船に乗り、光の速度よりも速い速度で飛んでいくわけです。（光よりも速く物体は進めないというのが、相対性理論なんですけど）光の速度より速いのですから、その宇宙船から地球を見ると、昔のことが見えるのです。自分がまだ知らない光景が出て来て、自分の奥さんが昔、誰か恋人と逢引きしている……なんていうのが出て来たのをおぼえています。

過去の地球上の出来事が見られるというのはSFであつて現実にはありえないのですが、今我々が見ている星は、我々が生きているよりはるか以前に星から出て来た光を見ているわけです。宇宙は大きいので、光の速度でも大変時間がかかるんですね。もっとも遠い星雲になると、今から何億年前にその星を出発した光が、今見えているわけですね。

空を眺めるということは、ただ平面的に眺めているのでは

なく、時間的に奥行きのある空を見ているわけですね。空間的に遠いというだけでなく、時間的にも遠いものを見ている。人間の存在が、ただ現在のものだけでなく、過去のもの全部含めて、今それをとらえているのだということが自然科学の結果よくわかってきたので、それもまた、自然科学によってもたらされた夢の一つであるような気がいたします。

### 不思議な星の話

英語の童謡に "Twinkle, twinkle, little star" というのがありますね。"How I wander what you are" その「何か」ということが問題なのです。昔は地上のものと全く異なるものだと考えていたのが、地上と同じ素粒子でできていることがわかった。ところが同じ素粒子でできているといっても、でき方がいろいろあって、自然科学が進歩するにつれて、我々の想像もつかなかったような星がみつかって来たのです。そのいくつかを、ここで御紹介しましょう。

#### ☆

みなさんお聞きになったことあると思いますが「準星」というのがあります。つい十何年前に初めて見つけたのも

のです。星座表を見ますと、そこにちゃんと出ていまして、つまり、太陽系の銀河系宇宙の中にある星だと言って誰も疑わなかったのです。ところがたまたまある機会に、偶然ラジオ・スター、つまり電波だけ出している星があってそれを調べていたら、そのそばに変わった星がある。そこでためしにその星のスペクトルを調べてみたら、とてもない遠い星だということがわかった。それまでの天文学者の常識では、その星は太陽系の中の星だから、わざわざスペクトルを測る必要はないと思われていたわけです。

太陽系の属している星雲である銀河系宇宙は、円盤の形をしています。こういう星雲が宇宙には何千万と浮いていて、一つ一つの距離が何百光年、つまり光の速さでいっても何百万年もかからなければ行けないような遠い所に沢山の星があって、それがまたクラスターというグループを作っているわけです。それが全体にもすごいスピードで散らばって行っているというのが、今の宇宙の姿です。

ちょっと考えてもわかりますように、この宇宙、つまり我々の銀河系宇宙の星だと近いから、まあ太陽位の大きさでも見えるわけです。ところが他の星雲に行ってしまうと、あまり遠くて一つ一つの星は見えない。せいぜい、アンドロメ

ダ星雲とかいろいろありますね。その星雲の格好がわかる程度です。

ところがですね、準星は銀河宇宙の外、地球から見ると何十億光年という宇宙の果てにあるんですけど、不思議なことに星雲ではない。非常に小さい、太陽より少し大きい位の大きさのものであることがわかった。それは一体どういうことなのか。つまりたった一つの星であるのに、星雲全体よりもっと強い光を出している。そんな星がどうして可能なのか、僕らにはよくわからないのです。しかも、ものすごい光で輝いているだけでなく、その光が周期的に変わるので。それがなぜかということも、よくわからない。

☆

この頃、通俗的な本にも出て来ますし、SF好きの中学生や高校生にも関心をひいているのに、ブラック・ホールというのがあります。ポールの小説に、何でもそこに吸い込まれてしまいうず巻きの話がありますが、ああいう形で、何でもそこに吸い寄せられてしまうのがブラック・ホールで、宇宙の方々にそういう魔の淵のようなものがあるというのです。本当にあるのか、ないのか、今ちょっと議論があるわけですが、まあ大体あるだろうということになりました。

ブラック・ホールというのは、どういふことなのかと言いますと、みなさん中性子星というのを聞きになったことがありでしょうか。

原子というのは真中に原子核がありまして、回りに電子がまわっている。原子核は、原子全体を一キログラムの球とすると、バチンコの玉位の大きさなのです。そのバチンコの玉に、重さのほとんど九十九パーセントが集中しているので、原子核というのは密度が高くて、相対的に言えば極端に重いわけですね。

中性子星というのは、星全体が中性子でできていまして、つまり原子核と同じ密度のものがぎっしりと空間全部に詰まっているような星なのです。それは、とてつもなく重い星になるわけで、我々の想像できないような状態にあるのです。

たとえば、セラチンの中に無理に鉄の玉を入れると、その玉の回りのセラチンはぎゅっと縮みますね。そういうふうにも、ものすごく重い中性子星が空間にありますと、その回りの空間は、ものすごい勢いで歪みができてしまう。歪みができるとどうなるかというと、レンズと同じことで、光が曲るわけです。あまり歪みが大きくなると、光がどんどん曲るから、光は外へ出られなくなるわけですね。そこで、そこから

は光が出て来なくなる。だからブラック・ホールと言われる。つまりそこからは光が出て来ないような場所ができてしまうのです。

宇宙の方々に、魔の淵のようなものがあって、物が行くともみんなその中に吸い込まれちゃう……なんて考えると、最初にも申しましたように、自然科学は散文的なつまらないものだと思っているけれども、大変楽しい想像をかきたてるものが出て来るのです。

# ☆

最近わかったのには、その他、X線を出す「X線星」とか、非常に規則的にパルス（電波）を出す星「パルサー」とかがあります。最初にパルサーが見つかった時には、理性を持った人間のようなものがいて、それが送っているんだろうと大変興奮しました。けれども調べてみると、そうじゃなくて星が送っていることがわかりました。

そういうふうに、天体に関しては、私たちの知らないことはまだまだ多い。これから先どういうものがみつかるか、また楽しいわけです。

# おわりに

子どもが天体に興味を持つようになるには、私はちょっと勝手なことを言わせていただきますが、やはり親が天体に対する親なりの知識と興味と、そういう面白いものが沢山あるんだということを知っていた方がいいのじゃないかと思えます。つまり、空には不思議なことが一杯あると親の方が知っており、親のイマジネーションが豊かであれば、自然に子どももいろいろなことを考えるようになるのではないか。それから子どもがいろんな不思議なことを言っても、親の方にそれを受けとる豊かさが、もつとできるんじゃないかという気がします。

自然科学というのは、空想とかイマジネーションがなく、決められた枠だけでしかないように思われているのは、とても残念に思います。しかし、かりにその枠の中だけで考えても、今までいろいろ申し上げましたように、非常に面白いことが一杯あるということを申し上げておきたい気がいたします。

（上智大学）

（お茶の水女子大学で行なわれた「幼児の自然認識と教育」の研究会の講演を収録したものです）

## わたしの星



神 沢 利 子

星の名を知ったのはどの子も同じように、七夕の織姫さま彦星さまであり、天の川なのだろうか。

たぶんわたしもその頃、北斗七星をおぼえ星を仰ぐことを知ったのだろう。

白夜に近い北国の夏の夜であった。南サハリンのヤナギラの紅の燃える原野の上には、ただただ限りなく広い大空がひろがっていて、夜ふけても仄明るいその空に、星は夢のように瞬いているのであった。ヤナギランの綿毛が風に舞いどび、やがて、果てもなく雪の降りつむ冬がきて、原野も川も白く凍りついてしまう。

冬は夏とは反対に長い長い夜が続いた。

ネオンのない漆黒の空にきらめく星々は、音を発するようにつよくかがやいていた。

病気で中学を休んでいた兄が、よく星を眺めていた。その兄に教えられて琴座に鷲座、白鳥座にカシオペア、オリオン

とさまざまな星座をおぼえた。七夕で親しい織姫や彦星も別の名で知り、北斗七星が大熊座であるとは、それもふしぎでならなかった。

『星座巡礼』(野尻抱影著)という本を知ったのもその頃で、たしかその冒頭には、年に一度、まわってくる旅回りのサーカスとうたって、プレイアデス星団や星々の名がかきつらねた詩がのっていた。小学生だったわたしは兄にくっついて雪の丘に頬を凍えさせながら、星空を仰いでいたものだった。

澄み切った冬空にかがやく星は、あまりにそのひかりがつよいので、まるで無数の星の目に射すくらめられるような気がした。そして何光年という気の遠くなるような遠い彼方にある星々――

果てもない宇宙に恐しさが湧いて、思わず顔をおおってしまふこともあった。

それからほかに琴座に鷲座、白鳥座にオリオン。いろんな

星座をおぼえたけれど、北斗を見る時、ふしぎにところが安らいだ。

亜寒帯とよばれる北の果てにくらすと、北斗は特に親しい星であつた。だれが見てもすぐわかるひしゃくの形をした北斗七星は、方角を示す北極星のガイドの星だ。太古からの旅びとたちが、この星を仰いだ時のころの安らいと明日の旅路への励ましがそのまま、わたしにも伝わるのだろうか。

北斗とオリオン。あの雄々しい冬の星座はなぜかわたしの星のような気がしてならなかった。

☆

十三の夏、東京へきた。病弱で休学をしていたが、よく二階の窓からこっそり屋根へ下り、猫のように屋根に坐つて星空を仰いだ。北冠という星。冠の星をあたまにのせることをうっとり夢みているわたしの前に、突如、体温計や水枕のかたちの星々が現われ、悪意に満ちた目くばせをするのだった。敗けるものかと舌をだしたり睨んだりするのだが、たまらなくなつて部屋へかけこみ、ふとんにもぐりこむ。だがその隠れ家にも憎らしい星めは注射針やピンセットや同類をひきつれてのりこんでくる。あたまからふとんをかぶつたその中の暗い宇宙空間。歯をくいしばるわたしの耳に、いつもく

る医者黒い幌の人力車の、死者の使いのような不吉な音ががらがらとこだまし、ああととりすぎる思いで見あげる星の冠は光茫を失つて、はかなく薄れ、(はて、わたしは死んだのか)と、そのころのわたしは幼い詩を結んでゐる。

☆

おとなになつて星を仰いだのもふしぎに病気のころだ。

夏も終りに近い日のこと、未明におきて息すれば痛む手術後の胸をかばいながら、手洗いで戻る長廊下は虫の声の中にあつた。絶えいるように鳴いてはまた湧きあがる虫の音に誘われて、おぼつかない足どりのまま庭へおりたつと、まだ明けやらぬ群青の色濃い大空に、星がまたたき、「あ、あれは三つ星」今、この夏の空に？ と、いぶかしく見上げると、三つ星を囲む四つ星も見えて、それはたしかにオリオンなのであつた。胸のうちをふしぎに熱いものがつらぬいていき、虫の音のただ中で、空が白み、星々が消え失せるまでわたしは立ちつくしていた……。

そしてその目わたしのころは、しずかなよるこびに満たされていた。この星のまばゆい空にもあのオリオンが、冬の星々が正しい位置を占めてかがやいていることを信じていた。

(児童文学者)

## 星 高 原

### 菊 池 光 治

自分の好きな絵本を数冊、わきにかかえて街を歩くのが、今の女子大生のちょっとした流行なのだそうだ。夏の軽井沢もまた、若い女性で占領されるようになった。

☆

絵本と軽井沢。どちらも私が最も愛すべき存在だった。

「絵本のような街」これが、私が持っている軽井沢へのイメージなのだが、最近そんな軽井沢を訪れたのは、草津白根にスキーに行った帰り、まだ雪が降ってきそうな初春のことだった。妻の美枝子と、近所の小学校四年生の祐之君、それに祐之君のママがいっしょだった。白糸の滝からの山道を三笠に抜け、泥まみれになった車でゆっくり街を一周してみた。

さすがに人影はまばらだった。いつもなら五、六月頃までは静寂に包み込まれるこの街も、最近のブームのため、四月の下旬からもうにぎわいだして、そのためか、こんな初春か

敵冬にしかその素顔を見せてはくれなくなっていた。

若い連中で埋めつくされるテラスのある喫茶店の隣には、馬が数頭つながれて、ひなたぼっこをしている。道を横にそれて裏道に入れば、テニスコートにつながる道の樹々は葉を落として風に震えている。夏になればこの殺風景な道を、色とりどりの服が埋め、楽しそうな笑い声やかけ声が向こうから聞こえてくるのだろうか。今は人の声ひとつなく、吹く風はそのまま人の心の中にまで入ってくるようだった。

急に熱いコーヒーが飲みたくなった。祐之君は何がいいかと後ろをふり向くと、はじめてスキーをはいて、それでいて素質があるのか二日目には平気な顔をして白根から草津まで三・八キロのダウンヒルを一気に滑りおりてしまった彼は、もうくたくたとばかりねむっていた。

起こさないように、ゆっくりと車を旧軽のホテルの前につ

ける。さすがにここも、訪れる人は少ないとみえて、張り出したテラスのまわりには木の枝が打ちつけられていた。

ロビーを通り抜けて、案内されたカフェテラスは、夏のあいだ使われている場所とは反対側の、ずっと奥まったところにある部屋だった。大きな椅子にどっしりと腰をおろすと、私も少し疲れを感じはじめていた。

ママと、「ほんとうにお疲れさまでした」などと言い合っているうちに、美枝子と、急に元氣を取り戻した祐之君は、隣にあるゲームコーナーに行ってしまった。やがて運ばれてきた熱いコーヒーをひと口飲んで、煙草に火をつけるころ、おもてには夕暮れが迫っているはずだった。私にとつての静かな時間が、落ちついた木調家具とインテリアからなる空間を流れていった。軽井沢がもっとブームになって、もっと観光客が増えつづけたなら、やがてはこの空間も、近代的なホテルの一部に組み換えられてしまうのだろう。そう考えて、ふと一冊の絵本が頭の中に浮かんだ。花の咲く丘に建てられた小さな家のまわりに、ある日一本の道ができる。たくさん車がやってくる、やがてその道は立派な舗装路となり、どこからともなく集まった人々によって街がつくられる。鉄道の高架線の下敷きとなって苦しくゆがむ小さな家は、さいご

にやっともとのような場所に移してもらって息をふき返す、という内容だったが、美しい田園の中に建てられた小さな家を、時の流れの中に塗り込めていったこの絵本には、永久不変の真理が横たわっているように思えた。

二本目の煙草をつけようとするころ、祐之君がもどってきた。見ると手に皮の袋を握りしめている。聞けば、ゲームでコインを三十枚も当てたという。いつもテレビとお友達だという彼らの世代がおとなになるころ、この街はどうなっているのだろうか。三・八キロのダウンヒルに挑戦し、果てはコイン三十枚を獲得したヒーローを車の後席にお乗せして、あかりのともったホテルをあとにした。車は踏切を越えてバイパスを走り、やがて碓氷峠にさしかかっていた。遠くに星がまたたきはじめている。もう軽井沢の上界は、数えきれないほどの星に埋めつくされているのだろう。

# ☆

流行が去ってなお、軽井沢は美しいだろうと思った。流行が去ってなお、絵本は真理に一步近づくだろうと思った。どちらとも私はずつつきあえるような気がしていた。

(絵本店経営)

## 「アメリカ人は本当に子どもが好きか？」

by Kenneth Keniston

(児童に関するカーネギー会議議長)

*Childhood Education*

October 1975

はじめに——アメリカにおける子どもの実態——

一九七二年の終り、ニューヨークのカーネギー基金によって「児童に関するカーネギー会議」が設立された。この会議は、その議長を勤めるケネス・ケニストン（イェール大学精神医学教授）によると、次のような特色を持つものである。「この会議は、経歴も、専門分野も、考え方も異なる十二人の男女から成る小さな私設委員会で、アメリカの子どもたちと家族の満たされていない要求や問題、及びその中で最も緊急の解答を要する問題を理解していくことにある……」この会議の意図するところは、国際児童教育連盟（ACEI）のアクション・プログラムの一つ「児童の尊厳と尊重」と極めて関連深いところから、会議の経過報告の一部を「Childhood Education」で紹介することになったのである。

「アメリカ人は、本当に子どもが好きか？」という悲憤感に満ちた標題から、今日のアメリカの子どもの置かれている状況について、あるイメージを持つことができるが、最近アメリカの子どもや家族にどんなことが起こっているのか、ケニストン教授の叙述から捕え、我国（日本）の子どもや家族の問題を考える糸口にし

たい。

「アメリカ人は、本<sup>ほん</sup>当<sup>たう</sup>に、子<sup>こ</sup>どもが好<sup>この</sup>きか？」という問に對して、きつぱりとした「はい」と、不愉快<sup>ふげつかう</sup>そうな「いいえ」という二つの答のうちどちらかが、返<sup>へ</sup>つて來ることであらう。

私たちの感情を証拠として使うことができるなら、勿論私たちは子どもが好<sup>この</sup>きだ、彼等を愛しているとさえ答えられる。もし、私たちが信じているテストや、私たちが育<sup>はぐ</sup>み、祝福し、世代から世代へ受け継いできた神話に価値が認められるなら、アメリカは、子どもを愛する国であるばかりでなく、子ども中心の国であるとさえ言うことができる。しかしこの素晴らしい感情は、あまりにもしばしば、あまりにも長いこと、名状し難い、それでいて一貫している複雑な社会的、経済的な圧力によって、損<sup>そ</sup>われ、傷付けられてきた。従<sup>したが</sup>つて、今や、「いいえ、私たちは、本<sup>ほん</sup>当<sup>たう</sup>は、子どもが好<sup>この</sup>きではない」と答えなければならぬ時期に來ているし、それを裏付ける事実も沢山あると、ケニストン教授は主張するのである。

例えば、アメリカの乳兒死亡率は呆れる程高く、国連の調査によると四十二か國中、十五位（香港の上）にランクされている。また農業生産が増加しているにも拘らず、百万人の子どもが飢えと栄養失調で苦しんでいる。子どもは、生活上の基本的な物質的

要求を満たす權利を持つていと言われながら、六人のうちの一人は、政府が決めた貧困以下、二人に一人は、「最低だが暮らせる」生活をしている現状である。就学前兒童の母親の三分の一、學童の母親の半数は働きに出ているが、今もつて子どもに對する適切な世話の必要性を主張しなければならない実状である。更には、學校制度は、すべての子どもに平等な機会を与えるはずのものなのに、實際は十二年の義務年限に、貧富の差を拡大している。他の國の人々は、アメリカを科學技術の進歩した、物質的には豊かな國と見ているかもしれないが、私たちは他の工業化の進んだ國々を、子どもと家族を支える幅広いシステムを持った進んだ國と見ていかなければならない。カーネギー會議の判断によると、この分野に関して、アメリカは全く「後進國」なのだという。何故、このようなことになっているのか。その病根は、そもそも經濟システムにあるのだが、ここでは三つの問題——家族数の縮小、子どもの知的偏重主義、阻害の恒久化——から子どもを損つてゐるものの社會分析を行なつてゐる。

#### 一 家族数の減少

最近の統計は、外で働く母親の急増を伝えている。開拓時代には、たいいていの母親は外で一日中働いていたが、その頃と現在と

の著しい違いは、家族数の減少である。家族数縮小の原因は、離婚率の急増、核家族化、兄弟数の急減及び、未婚の母の増加等による。これによって、益々多くの子どもが、長い時間誰も世話をしてくれる人のいない家庭で過ごさなければならなくなってきた。それでは何が家族に替わる役割を果たしているかというところ、

まず第一にテレビ。テレビは今や多くの子どもにとって、チラチラした青色を楽しむ両親となっている。第二は仲間、そして第三は学校や幼稚園があるいは共働きの両親が見つけた種々の子どもを保護する施設。今日、数百万のアメリカの子どもが、このように身内以外の者と、家庭の外で大部分の時間を過ごしており、「鍵っ子 (latchkey children)」と呼ばれる、一人置き去りにされた子どもも増えている。

その結果、働く母親の大多数は、罪悪感を持ち、子どもが放置されていることを心配しながら働いているのである。生計のために、男性よりも安い賃金でも、下等な仕事でも働かなければならない。経済的な圧力が絶えず我々にのしかかっている実状の中にあっても、子どもたちは家族の中で、家族から、一貫した保護と養育を受けるべきであるという感情をしばしば伴うことは、会議の間で次第にはっきりしてきたことである。こうした感情は、疑いもなく現実的で重大な問題となっているのに、それは社会にと

って無関係なものとして、親を親として援助することを怠っている。外で働けば賃金を払い、育児に専念する男女は無報酬というのでは、アメリカの家庭は荒んでいく一方である。もし、家庭が、寮、即席のサービスをする食堂と娯楽センター、消費単位として以上の意味を持たなくなるとしたら、(事実、急速にそうなりつつあるが) 私たちは、その主な理由を、アメリカの怠慢のみならず、経済の圧力の中に見出していかなければならない。もしそのような事態が発生したら、子どもに対する私たちの本當の態度について、どう評価されるかは自明である。

## 二 子どもの知的偏重主義

子どもが良い家庭から得られるかもしれないものを、子どもから奪い取っている間に、私たちは、学校で子どもに何を与えてきただろうか。私たちは、子どもを(大人と同様に、全人的面から見なければいけないのに)ますます「頭脳」として見る傾向にある。学校や幼稚園の教育は、極めて狭く定義した認知技術や能力を強調し、人間の他の潜在力を著しく無視している。

ヘッド・スタート・プログラムは、その評価の出た時、様々に批判された。大方の批判は、教育プログラムというものは、一日二、三時間それに参加すれば、貧困家庭の圧倒的な不利を簡単

に取り除くことができるという楽観論に向けられた。「文化喪失」を単に知的刺激の欠如に帰してしまつたが、文化喪失や貧困の原因をなしているものは、経済制度であることを、この際見定める必要がある。

ヘッド・スタートは確かに、社会の底辺の子どもの能力促進や医療サービスという点では成功してきた。しかし一方、知的発達やテストの点数等、量的に測定可能な物差しで、子どもをランク付け評価するという悪い傾向も生み出してしまった。この傾向は、単に教育界にとどまらず、大人の社会にも見られることであるが、教育効果や価値判断の中心的尺度、更には経済システムやそれについての考え方も、もっと質的な規準によらなければならぬとケニストン教授は主張する。

### 三 阻害の恒久化

「アメリカの全児童の四分の一がうまく育てられていないというのは、悲劇的な事実である」という部分は特別に強調してイタリック体で記述している。阻害の原因として、人種問題、貧困、ハンディキャップ、両親の生活苦からくる子どもへの愛情不足という四つがあげられるが、中でも最もひどい阻害は、身体的なものではなくむしろ社会的、心理的なものである。阻害され、基本的

要求を拒否されている子どもが学ぶものは、失敗感だけである。彼等はやがて、状況を乗り越える最も良い方法は、探究心を押え、危険を犯さないようにするか、逆に、絶えず攻撃することであるとそうようになるだろう。

米国の歴史が謳歌してきたテーマは、平等とフェアプレイであり、特定の子どもに重荷を負わせるべきだとは歌ってこなかった。それどころか、いつの時代にも同じ約束を繰り返してきた。「あなたの子どもを含めて、この地に住むすべての者が、アメリカ社会の完全なメンバーとなろう」と。米国の歴史はこの約束を確かなものにする努力を行なつて来たが、その歩みはあまりに遅く、不完全なものであったと言わざるを得ない。

阻害の恒久化は、個人の非道德の故というよりも、私たちの社会の機構、既に百年以上も続いてきたその機構に原因がある。この国の富と収入の配分は百五十年来変化していない。一方私たちは、革新、成長、利潤を休みなく求める社会制度の中に生きているのであるから、どうすればその制度がよく機能するか注意していかねばならない。少なくとも悲劇的なこと、破壊、飢え、虐待等に支払われるとてつもなく巨大な浪費はすべきでない。

## 終りに——残された課題——

以上述べた三つの問題の原因は、経済システムにあることを自覚し、家族や子どもを混乱させているこれらの原因を除去する活動が必要となる。即ち、現在も子どもを育てているすべての家族を支えるような、わかりやすく、誰もが例外なく利用できるような施設——特別の人の為ではなく、権利によって、すべての人が利用できる施設——を発達させること、これこそは子どもの尊厳を守るために直ちに組み込まなければならない課題である。

アメリカ人は、建国以来個人主義に頼ってきた。しかし今や、個人的な抵抗ではどうすることもできない社会的経済的な力の存在を知るべき時である。個人主義は大切に存続されるべきことは確かであるが、個人同士が競争する古い型の個人主義ではなく、関係する人々が家族のようにふるまうような形に移行すべき時である。

最後に、ケニストン教授は、「残された課題は、これまで述べてきたことを直ちに実行することである。それができた時、アメリカ人は、初めて本当に子どもが好きであると答えることができるのである」と結んでいる。

ケニストン教授の論文を読んで、二十世紀がエレン・ケイによって児童の世紀と期待されたにもかかわらず、子どもを取り巻く現状は暗澹たるものである思いがした。彼の掲げる問題は、遠い異国のことではなく、アメリカを先進国として仰いできた日本の子どもや家族の直面している問題でもある。日本は、心情的には子どもを大切にし、中心に置いている国と言われ、米国のようにひどい阻害は表面上ないように見える。しかし、急激な自然破壊や試験地獄の中で、子どもは自由な時空間を奪われ、心まで荒廃させられているのではないだろうか。私たちも「本当に子どもが好きである」と答えられるには、どうしたら良いのか考えてみたいと思う。

(お茶の水女子大学・清水いく子)



この論文は、米国においても賛否両論のあるところで、この論文に書かれた実態が果たしてあるか否かを検討するため、ACEIでは「追跡調査」委員会を設置している。その報告は追ってなされるので関連記事は、再び紹介する予定である。米国が当面する問題の大きさを理解するだけでなく、あえて恥部をあばき出し、それに序列をつけて解決にあたらうとするその姿勢も理解されてよい部分と思われる。

(大戸)

ぼくはチンパンジーと

話ができる

亀井一成著

P H P 研究所発行

私は、はずかしいことに題名にひかれてこの本を読み、期待通りの内容に時には涙を流し、時にはたまらないほほえましさを感じました。そしてあまつさえ編集の水田さんに「軽い本、お貸ししましたか」などといってこの本をお貸しました。ところが「とても良い本でしたから図書紹介を」との電話をいただいたのでまた改めて読み直し、それこそ私自身の軽さに、いやになってしまいました。

この本にはまず、小さい時から動物好きだった（ここまではよくあるケースですが）著者が、中でも魅かれた象のキー

パーとして神戸の王子動物園に入られたいきさつが書かれています。そしてその象が、著者に忠実であったために芸達者になり、その上そのために地方巡業が多くなり、ついに結核で命を落とすまでの生涯を克明に書いてあります。その時にまだ青年キーパーであった著者が、「動物はやはりのほほんと生かしてやらねばならない。檻の中に閉じ込めたのならなお、せめて伸びやかに、野性への郷愁をたしかめつつ、生かしてやらねばならない」ことに気づかれたことに、私は本当に頭をがんとたたかれたような思いを味わいました。その後著者は、この精神を貫きながら題名のチンパンジーとの生活を始め、チンパンジーの場合はショーをやめ、子どもを生ませることに情熱をそそいだ、その記録が書かれています。し

かし序文に「以下は断じて動物の飼育記ではない。動物と人間との触れあいを通じて、地上の支配者面をしている人間にいま何が問われているか、それを思い起こして、燃えるような思いにとらわれるのである」とある通り、全篇を通じてこの著者の燃えるような思いが脈々として読者に訴えかけているのです。

チンパンジーの赤ちゃんの人工飼育に当たっては、著者の奥さま息子さんのあたたかい協力、そしてそれらがまったくためにしたのではなく、そうしなければ育たなかったからという、一種の無心の境地をそこに見て、私は改めてこの本、著者の両方にほれぬいてしまいました。いつの日か、このご本人とご家族、そして愛すべき息子さんたちにお会いしたい……と思っています。（赤間峰子）

# 保育の体験と思索

## ——子どもの世界の探究——（八）

津 守 真

### 三歳児の作るもの

はさみで切って鉛筆やクレヨンで曲線をかいた紙片、細長い紙をセロテープで貼ってひらひらさせたもの、折紙に何かをかいいて最後に何枚も貼り合わせたもの、などなど、三歳児の作るものには、一見無雑作でたいした意味もないかのように見えるものが多い。私の手もとには、いろいろの機会に子どもからもらった、そのような作品が数多くある。短いふれあいの間にもらった紙切れを、ずっと後になって手にとってみると、その子どもの肌のぬくもりが伝わってきて、その子に再び対面しているような気がする。写真1はその一例である。その子どもは、いまはもっと成長していて、こんな幼稚なものはもう作っていないだろう。けれど

もこれを作った時の心は、いまもどこかにはたらいっていて、この子どもの現在の一部を作っているのではないかと思う。こういう一見なんでもない作品は、幼稚園の三歳児のクラスの中にも、数多く見られる。それはむしろ先生の見ていないところで作られていることが多いかもしれない。机の下、床の上などに落ちていて、片づけるときに掃き集められ、屑籠に捨てられてしまうかもしれないようなものである。しかし、実は、一番子どもらしいものであり、それを作ることによって、子ども自身も満足を得ているような、実質的な作品である。

それが作られるときの傍にいても、子どもが何を作ろうとしているのか、私どもには分かりかねることが多い。しかし、じっくりつき合っていると、おとなには意味が分からないものであっても、子どもが自分で思うように作り遂げるところに、その子ども

にとつて欠かせない成長の一步があることがわかる。  
 ここで私は、家庭の子どもYが、三歳児の年齢の時に作ったものを材料として、この段階のいわば初歩的な作品について考えてみようと思う。「そのほんの一端を垣間みるにすぎないのであるが。」

### いくらか分かりかけてくるヒント

三歳児の作るものには、実際、意味のよく分からないものが多い。たとえば、Y(1)（6月9日3・7―5）は、細長い紙の先に、丸く切った紙をセロテープで貼り、赤いクレヨンでうずまき

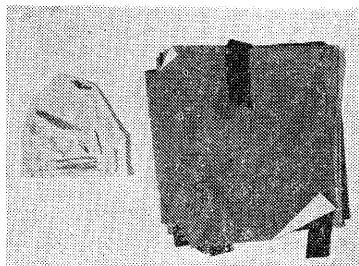
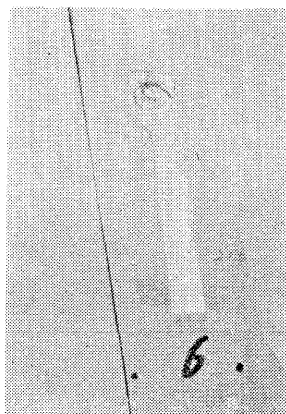
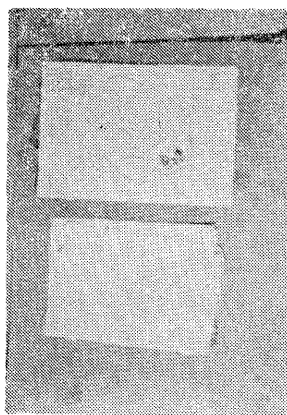


写真1



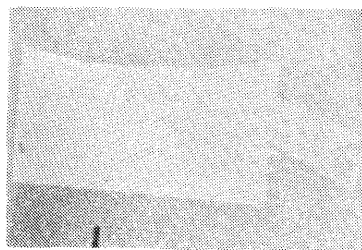
Y(1)



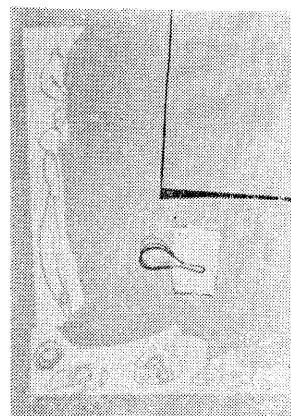
Y(2)

にかいたものである。Y(2)（6月10日）は、画用紙を折りたたんでセロテープでとめたものである。表面や内部に何かかいていることもあり、かいてないこともある。Y(3)（6月10日）は、画用紙を二回折って、はさみで刻みをいくつもいれ、開くと三列に刻みの入った模様ができる。それに細長い紙をセロテープで貼りつけたものである。いずれも、子どもは何かを作っていると思われるが、何であるのかは明瞭でない。何かの物ではなくて、子どものとらえたある感じを、ここに作ろうとしていたと考えた方がよいだろう。

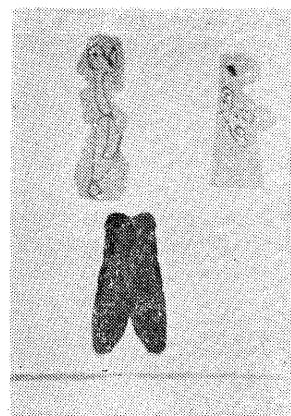
Y(4)（6月14日）は、紙のヘリの直線部を利用して切ったものの上に、黄色のクレヨンで線をかいたもの、Y(5)（6月19日）



Y(3)



Y(4)



Y(5)

も、紙のへりを利用して。紙の縁や角を利用して切ったものが他にもいくつもあるが、Y(6)（7月15日）の同様のものは、「カラスがないところ」という言葉を伴っている。私は子どもが作ったものに対して、何を作ったのかを問うことはめったにしない。こちらから質問すれば、子どもは何かおとなの喜びするようなことを答えることになって、それはかならずしも子どもの思っているものと一致しないにもかかわらず、おとなの方でそれと悪いこみかちになると思うからである。この場合に「カラスがないところ」と言ったのは、この子どもが「カラス」によって感じるものと、ここに作られたものとの間に共通なものがあるからと考えられる。なきながら空をとぶカラス、屋根や木の上で

何かを口ばしでつくカラス、突然空から舞いおりてきて地面をつつくカラスは、いずれも子どもにとって身近なものである。そのカラスを、子どもは紙の縁の直線や角に結びつけているのは、カラスの口ばしや動きの直線性や角に印象づけられていると考えやすいであろう。

十年後に、同じ子どもに私はたずねてみた。

「カラスって好き？」

Y 「こわいけど好き」

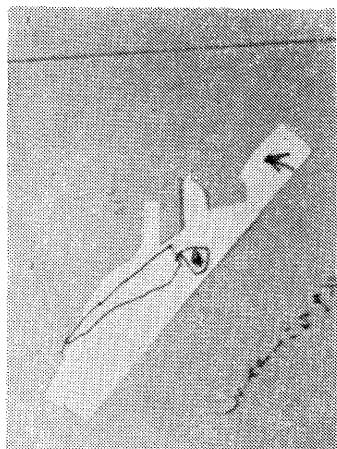
「何がこわいの？」

Y 「急にとびかかってくるみたいでこわい」

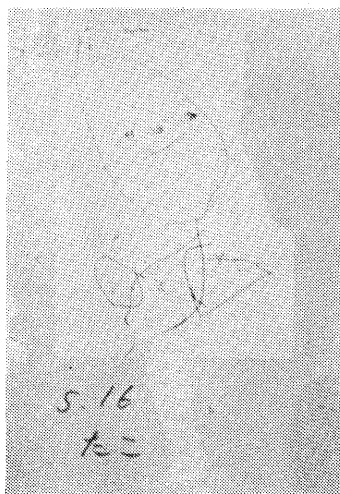
Y 「カラスって、シューッととんでくる」

Yのとらえているカラスは直線的であることがわかる。

Y(7) (5月16日) は、画用紙に人物を描いてから、細長く紙を切り、セロテープで貼りつけたものである。Yはこれを「たこ」という。風のしっぽと考えれば、この細長い紙片を貼りつけたことと説明は一応つくのであるが、Yは何故風のしっぽをつけたのだろうか。三歳のYにとっては、道路の上をひきずって歩くときに動きまわる風のしっぽは、空高くとぶ風よりもっと身近なものだからではないだろうか。自分の足もとでひらひら動きまわるものが、この細長い紙片ではないだろうか。



Y(6) カラスがないところ

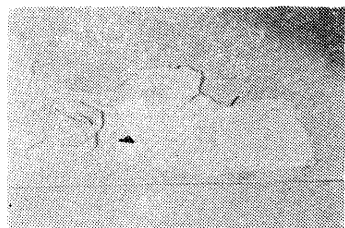


Y(7) たこ

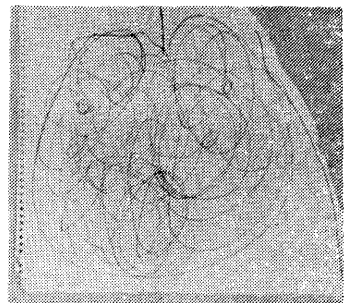
Y(8) (5月19日) は、「うさぎ」と名付けられたものである。Yはこれにリボンをセロテープで貼りつけ、その端を持って歩く。引っ張って歩きまわるためのひもを、自分でつけたわけである。引っ張って歩くと、足もとでひらひら動く。

Y(9) (5月26日) は、「りんごだからね、ここきらなきや」と言って、りんごのわきを斜めに切った。これはりんごを食べるときに、皮をむく動作と思われる。

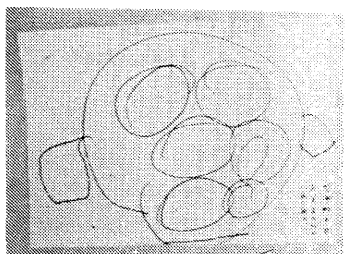
Y(10) (6月11日) は、「おいも おなべにいれてある」という。こういうのを見ると、まるいかこみの中の小さなまるは、おいも



Y(8) うさぎ



Y(9) リンゴだからね、ここきらなきゃ



Y(10) おいも おなべにいれてある

をかいたのだということがわかる。そして、両端の小さなかこみは、なべの把手である。こうして子どもが自分からかいたものの説明をする場合は、かならずしも多くなく、普通は何かおとなには理解できないものをかいたという結果になる。この例のように、自発的な言葉がつくと、なべの中でごろごろ動いているおいが、子どもにとって印象的であったことがわかる。

Y(11) (6月6日) は、うさぎの体の部分に、クレヨンで渦巻形に赤い曲線を描いたもので、「ようぶくぬったの」と言う。渦巻形の動きは、洋服を縫う動作と見てよいであろう。Yはこの後も、縫うとか編むとかの手の動作にとくに興味を持っている。こう見ると理解できる絵が何枚も出てくる。たとえば、Y(12) (6月

15日) は、Yは何も言っていないが、洋服を縫って着せてある人間と見ることに無理はないであろう。

Y(13) (6月6日) は、はきみで刻みが平行にいくつもいれてある。「あたまとかすもの」という。Y(14) (6月19日) は「ナイフ」と名付けられる。いずれも、偶然にできた形の類似性から名づけられたものである。

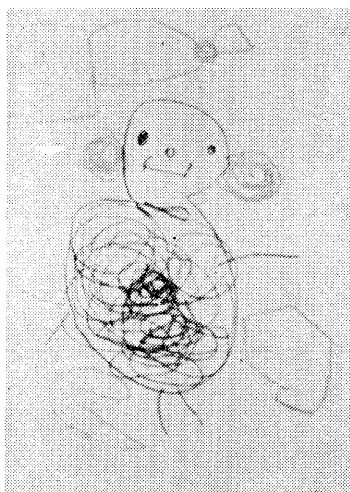
これらの例からも、一見何でもないような紙片が、子どもにとって、それなりの意味を持ってかいたり作ったりしたものであることが分かる。

## 親しみをこめてかく

ただのなぐりがきに見えるものでも、子どもは、親しみをこめてかいている人物画は数多くある。人物画の成立や変化は、非常に面白いテーマであるが、それだけで膨大な課題であり、ここではふれない。人物を描くときに、子どもはただ描くことの興味からだけかくのではなく、人物に対する親しみの感情が背後にある場合が多く、この初期の段階によくあらわれる。



Y(11) ようふくぬったの

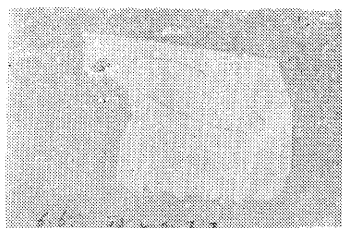


Y(12)

Y(15) (4月12日) は、「チャーチャン」(母親のこと)と名付けられる。最初かいているときに、「トート(父親)の髪の毛」と言って頭の上をかいていたが、それから顔をかいたら、かわいくなって、「チャーチャン」にした。それからリボンをつけ、スカートを鉛筆でかいた。このころ人をかくと「チャーチャン」と言って、人物画が親しみのある母親と結びついていることが多い。Y(16) (4月12日) は、「おとうちやまがかえってくるところ」と言って描かれたもので、自動車である。その紙の裏に描かれたのがY(17)で、「あめ」と言う。短い線で描かれた雨の中を、父親が歩いてくるところである。これらは小さな作品であるけれども、そのときの子どもの世界の中で大きな意味を持つ人物を親しみをこ

めてかいているように思われる。

Y (18) (4月29日) は、五枚の紙にいろいろ描いて後、ホチキスでとめたものである。その内側の一枚は母親である。何枚も重ねて貼り合わせ、内部が見えないようにしてしまうものがYの作品の中にはいくつもある。どうして一生けんめいかいたものを、のりづけして見えなくしてしまうのか。それは中の方にうずめて、自分だけの内密の空間を作っているように思われる。Y (19) (3月7日) は、十枚の折り紙を貼り合わせた一例である。幼児期をすぎた十年後になっても、Yは内部が幾重にも作られた箱を一番好むし、また、自分の部屋の中を他の人に立ちいられることをいやがる。Yにとっては、内密の空間は、自分自身の親しみのこめら



Y (13) あたまとかすもの



Y (14) ナイフ



Y (15) チャーチャン

れた空間である。母親を描いたとき、何枚も紙を重ねてその中に母親をいれこむのである。

Y (20) (4月12日) は、「チャーちゃんへのんちょなかお」である。かいているうちに、自分でもへんちょこな顔にみえてきた。そしてケラケラと笑う。ユーモアのある作品である。

### 作りながら自分自身の世界を発見すること

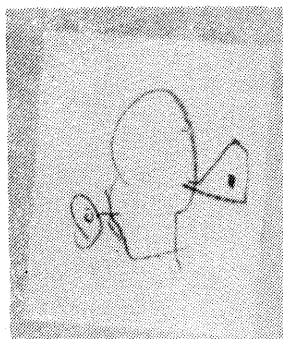
作ることやかくことも、他の遊びと同様、最初は、何かを作り、何かをかこうとしてはじめることが大部分である。最初からこういうものを作ろうと明瞭な意図を持つてはじめることは少な

いのがこの時期である。そして、作っているうちに、そこから新しいことを思いついて、思いがけないものができてゆく。

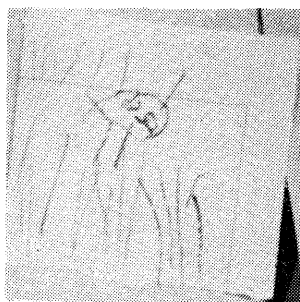
6月4日

夕食後、Yは大きい子どもが折紙を折ってはさみをいれ、「こういうの七夕さまにつけるんだよ」と言っているのを見ていた。

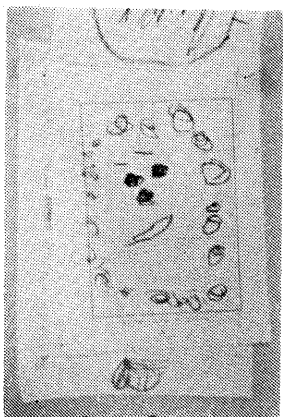
Yも折紙を出してきて、はさみをいれていたが、セロテープを持ってきて、折紙の一面を巻いて帽子のようにし、「ぼうし」と言っていた。(最初は大きい子どもが作るのを見るところからはじまっているが、じきに、全く自分のやり方で進む)それから、黄色いセロファンで円い面をはり、人形にかぶせてみていたが、そ



Y (16) おとうちゃまがかえってくるころ



Y (17) あめ

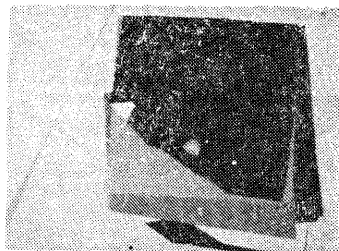


Y (18)

れでは不満足らしく、白いセロファンを、黄色いセロファンの上に貼りつけた。セロファンとセロファンとを貼るので、思わぬところにベタベタついてしまう。何回も試みた後によりやく成功する。次に、セロファンと折紙の間のすきまのあいだところに指をつっこんでいたが、台所にきてひき出しをあげ、ストローをさがすが見つからない。私はストローをさがして出してみると、そのストローを折紙とセロファンのすきまにいれてみる。ストローの端にセロテープをつけ、それをすきまに差しこんで、セロテープで向う側にとまるように試みる。このセロテープも思わぬところにベタベタつくので、何回も失敗しながらようやくうまくさしこみ、ストローが安定する。そしてYは「アイロンするもの」と言

って、それを持ち上げる。大きい子どもが、「ああ、アイロンのとき、シューッとするものね」と言って感心する。アイロンのときに使う霧吹きである。

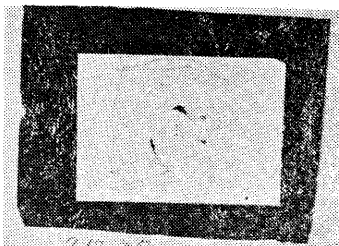
最初は、折紙にはさみをいれるところからはじまり、帽子になり、霧吹きになるのだが、かならずしも明瞭に意図が変化して展開するのではなく、途中でセロファンを貼り合わせるところ、ストローを安定させるところに大きなエネルギーが注がれる。はじめてきた帽子では満足せず、アイロンの霧吹きができ上がってはじめて満足する。何かいろいろの要素をふくんだ大きな時間の経過である。



Y(19)



Y(20) ちゃーちゃんのへん  
ちょこなかお



Y(21)

7月17日

Yは画用紙に曲線と円をかき、その中央をはさみで切りぬいて穴をあけ、その大きさの筒を画用紙で作り、穴にはめこむ。その画用紙を赤いセロファン紙の上にセロテープで貼ろうとする。同じような場所にセロテープを密集して貼り、貼らない部分はそのままあいてしまう。そのうちに、こっちは長いのを貼ろうと言って、セロテープを長く切って貼る。これを満足してみている。Y(20)参照。画用紙の中央に中心をつくるのに穴をあけ高く盛り上げて強調し、さらに画用紙の下に赤いセロファンをつけて、底辺のひろがりを作った。こうして高く突出した中心から底辺へと、三層のひろがりを持った作品である。この何かわけのわからぬもの

は、何か特定の形を持った物を作ろうとしたのではなく、中心を持ちながら、その底辺は奥深くへとひろがるこの子どもの世界把握のしかたを表現しようとしたものではないだろうか。この立体的なひろがりをつくることによって、この子どもは満足した。

これらの例にみるように、子ども自身が何かを作ったという実感を持ち、子どもの姿があらわれるような作品ができる過程には、最初は茫漠としたイメージが生まれ、それが次第に凝縮されて形をなしてゆく時間の経過が見られる。最初、子どもは何かを作ろうとするが、自分でも、何を作りたいのか分からない。いろいろ折ったり切ったりしているうちに、自分の中に、作りたいと思うもののイメージが醸<sup>か</sup>されてくる。だから、子どもが自分から作りはじめることがたいせつになってくる。他人から課題を与えられて作るのでは、その課題の要求に従うことが目標となつて、自分自身の中にイメージが醸成されてこない。何かがはじまるまでのこういうときの時間は貴重なものである。いろいろと試みながら、ゆったりと過ごすことのできる時間は、時間そのものが何かを生み出す力を持っているかのである。人間にとって、時間とは、針で刻まれる時計の時間の認識のみでなく、大きな幅を持って押し出され、ふつふつと湧く泡のように、生命あるものがその中にうごめき、そして何かを生み出してゆくような、生きら

れる時間の認識が重要ではないだろうか。子どもにとって、製作や遊び、課題など、おとなが時間の区切りをつけてゆくのではなく、子ども自身が生きることのできるような時間を与えることがたいせつなのだと思う。

茫漠としたイメージが生まれてくると、子どもはそれに従って作りはじめる。おとなの目には、何かが出来上がったように見えても、子どもは自分のイメージに合うまで、さらに作りかえ、試みる。このとき、子どもは必要な材料をさがしたり、どうやって思うものができるかわからないで、おとなの助けを必要とすることがしばしばである。おとなの方からいうならば、子どもの中にあるイメージをその場で直ちに知ることができないから、意味がよく分からずに、子どもの要求にこたえることになる。子どもが必要としているから必要なのであらうという、子どもへの信頼を手がかりにして行動することになる。そして子どもが満足するものが出来上がったときに、一緒に喜ぶと、子どもの世界は安定感とひろがりを持つことになるだろう。こうして作ったものは、おとなの目からは、形のととのわないものが多いが、よく見ると、このような作品には、その子どもの世界を見出すことができるのである。

(つづく)

## 黄色い野原

文と絵 柴 岡 治 子

遠くに電車が走っています。

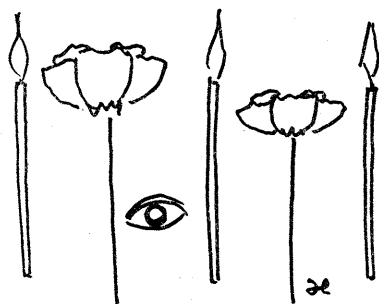
その前に黄色い原っぱがあります。黄色いのは月見草がいっぱい、いっぱい咲いていたからです。

その原っぱにはお宮をぬけていきます。

お宮の前におばさんの家がありました。

朝、お父さんが病院へお仕事に行くのについて、おばさんは何度も原っぱまで行きました。月見草は朝早い頃にはまだしぼまずに咲いていました。

月見草を英語でナイト・キャンドルと言うんだと、お父さんが教えてくださいました。ナイト・キャンドル、ナイト・



キャンドル、そうおばさんがお父さんのまねをしようと、みんなローソクに火がともってゆれているようにみえました。朝日がかがやいているのに、まだ残っていた夜つゆが光ったのでしょうか。

月見草がそんなにたくさん咲いている原っぱに、そのあとおばさんは出会ったことがあります。けれど目をつぶらなくても、遠くの電車と黄色い原っぱは、おばさんの頭の中にはっきりと広がってきます。そして月見草を英語でナイト・キャンドルと言うんだよと言ったお父さんの後姿も。

そのせいかおばさんは今もローソクが大好きで、世界のいろんな国に行くと、ついローソクを買ってしまいます。荷物が重くなって困ってしまうのに。

|| 終 ||

今月号には、星をめぐって、幾編かのエッセイが掲載されている。幼児と共に夜空を仰ぐ機会は、現実にはさほど多くないであろうが、天空に想いを馳せてみたい季節が訪れた、ということであろうか。

星は、船人に行手を示し、旅人の歩みを支えるものとして、「導きの星」であり、希望の象徴であった。ところで同時に、それは、古来から、凶々しく悪しき力の代表でもある。悪魔の代名詞「ルシフェル」は、明星を意味するラテン語であると言うし、わが国の紀記神話にも、「あまつみか星」という悪しき神の名が記されている。

星は、闇を切り裂き、またたいて止まぬその光によって、旅人の慰めであり、導き手でもあるが、すべてが無に帰る夜の中で、一人その存在を誇示することによって、神にそむく者、荒ぶる神でもあった。夜目にも鮮かに、遙か彼方からも

望み得るその白い光のゆえに、それは善悪二様の際立った両義性において、人と交わりを持ったと言うことになるうか。

然し、私どもは、いつか、その一面を排除し、自身の願望に引き寄せた片方の面でのみ、星をとらえ始めているのではないか。すなわち、ある人は、憧れ、導きなどの望ましい象徴として、また、ある人は呪いのしるしとして。

ところで、人間もまた、極めて両義的な存在である。男性の中に女性が住み、女性が優れて男性的でもある。優しさと残酷さは表裏の関係にあり、大胆さと内気さは分離不能である。子どもと言えども、例外ではない。

にもかかわらず、私どもは、とにかくその一面を捨象し、片側だけで彼を把握したと思ひ込みがちである。一学期も終るこの時期ゆつくりと記録を読み返して、一人々々に想いを潜めるべき時が訪れているのではないだろうか。(本田和子)

## 幼児の教育 第七十六巻第七号

七月号 ◎ 定価二〇〇円

昭和五十二年六月二十五日印刷  
昭和五十二年七月一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。

新発売!!

フレーベル館の

意匠登録出願中

# マイブロック B

園用  
セット

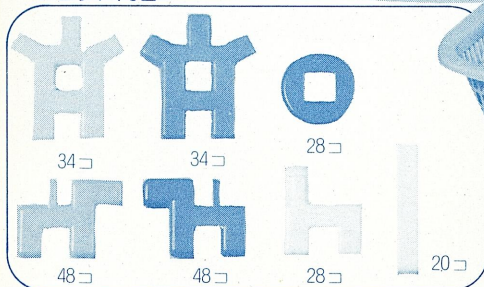


思考力と創造性を育てる

## フレーベル館のオリジナル商品!

- ★新しくユニークな形を採用し、造形教材として最適です。
- ★軽く、堅牢で、耐久性は抜群です。
- ★角が丸いので、乳幼児でも楽に組みはずしが出来、しかも安全です。
- ★色は全て安全基準に合格しています。

### ★セット内容★



240 個入

1セット 4,800円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

第1集のご好評におこたえして——

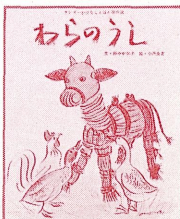
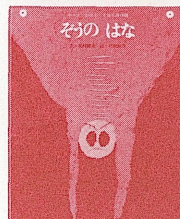
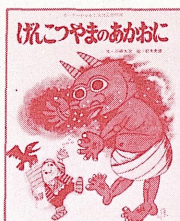
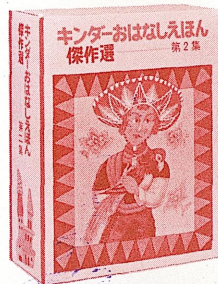
# キンダーおはなしえほん傑作選 第2集

新発売

全10冊 7,000円 L判・美麗ケース入

園文庫や、保育室に  
ぜひ お備えください。

- キンダーおはなしえほんの中で、特に好評だった物語を選んでいきます。
- 子どもたちに、読む楽しさをあたえるほんです。
- 装丁は、厚表紙、角背の堅牢な上製本になっています。



- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 1. さよならジャンボ        | 6. ぞうのはな            |
| 2. かぜのかみとこども       | 7. どうもろこし だろぼう      |
| 3. きたかぜのくれた テーブルかけ | 8. ロンロンじいさんの どうぶつえん |
| 4. げんこつやまの あかおに    | 9. わらの うし           |
| 5. なしうりと おじいさん     | 10. あめだまを たべた ライオン  |

あわせてお備えください。

## 第1集

全10冊 7,000円

- |                 |              |
|-----------------|--------------|
| 1. うりこひめとあまんじゃく | 6. おにがわら     |
| 2. あざらしチック      | 7. かのきホテル    |
| 3. こびとといもむし     | 8. あんぱんまん    |
| 4. タオルおぼけ       | 9. あいたたせんせい  |
| 5. おりづるのうた      | 10. 五つのはなのえき |

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課 TEL 東京 (03) 292-7781(代) にお問い合わせください。

創業70年・キンダーブック創刊50年

フレーベル館